

こ が の う え い せ き
古賀ノ上遺跡

— 第3次発掘調査報告書 —



平成27年(2015)3月
久留米市教育委員会

こ が の う え い せ き
古賀ノ上遺跡

— 第3次発掘調査報告書 —

平成27年(2015)3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、福岡県第三位の人口を誇る県南の中核都市です。その歴史は古く、縄文時代早期から8000年以上にわたって人々の暮らしが営まれてきました。交通においては東西南北の陸路と筑後川の水路が交差する九州の心臓ともいえる好立地を有し、また、気候においても、温暖で生活環境の良さには特筆すべきものがあります。このような環境のもと、久留米市は、豊かな自然や文化、歴史といった、地域資源を存分に活かし、「住み続けたいと思えるまち、日本一住みやすいまち、幸せを実感できるまち」を目指してまちづくりに努めています。

古賀ノ上遺跡が位置する久留米市北野町は、筑後川の北岸に位置し、隣接する小郡市や三井郡大刀洗町とともに、律令国家の時代に重要な役割を果たした地域です。今回の調査では、奈良時代に地方支配や馬の飼育に関わったとみられる特殊な集落の様子を垣間見ることができました。

今回の成果を生かして、久留米市北野町の特徴や魅力を掘り起こし、今後の久留米市の文化の醸成、観光の振興、教育の発展に貢献できることを願っております。

また、発掘調査に際して多大なご協力をいただきました医療法人三井会理事長神代弘道様をはじめ、周辺住民の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成27年 3 月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、病院建設に先立ち、平成25年度に医療法人三井会の委託を受けて実施した、古賀ノ上遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の江頭俊介が担当した。本書に掲載した遺構実測図の作成は、江頭と石橋英治、小西富美子が行い、浄書は江頭が行った。遺物の実測は江頭、丸山裕美子が行い、浄書は江頭が行った。遺物観察表は古賀和子が作成した。
3. 遺構写真は、マミヤRB67を用いて江頭が撮影した。遺物写真撮影はニコンデジタルカメラD700を用いて、久留米市埋蔵文化財センターにおいて、江頭が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
4. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
5. 本書に使用した遺構の略記号は、S B－掘立柱建物、S D－溝、S E－井戸、S I－竪穴住居、S K－土坑、S P－ピット、S T－墳墓を示す。
6. 出土遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
7. 本調査の略記号はK G U－003、調査番号は201315である。
8. 本書の執筆・編集は江頭が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の体制	1
3. 調査の目的と経過	2
II. 位置と環境	3
III. 調査の記録	6
1. 検出遺構	6
2. 出土遺物	11
IV. 総括	38
1. 検出遺構の時期と性格について	38
2. 古賀ノ上遺跡第3次調査出土方形板状鉄製品のC T撮影について	39
3. 古賀ノ上遺跡第2次調査Ⅱ－A区S I 009出土馬歯について	43
4. 古賀ノ上遺跡第3次調査出土の製塩土器について	44
5. 塩の用途と古賀ノ上遺跡の性格について	45

挿図目次

第1図	周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	4
第2図	古代の主要遺跡位置図 (1/200,000)	5
第3図	古賀ノ上遺跡第3次調査区配置図 (1/5,000)	5
第4図	古賀ノ上遺跡第3次調査遺構配置図 (1/300)	折込
第5図	S B 533・S B 610実測図 (1/50)	12
第6図	S B 620・S B 630実測図 (1/50)	13
第7図	S B 640・S B 20実測図 (1/50)	14
第8図	S D 13・S D 294・S E 593実測図 (1/10・1/40)	15
第9図	S E 21・S E 100実測図 (1/40)	16
第10図	S E 244・S E 247・S E 284実測図 (1/40)	17
第11図	S E 390・S E 582・S E 285・S E 293実測図 (1/40)	18
第12図	S B 200実測図 (1/50)	折込
第13図	S E 570・S I 19実測図 (1/40・1/60)	19
第14図	S I 240・S I 241・S I 242・S I 280実測図 (1/80・1/60)	20
第15図	S I 244・S I 420・S I 421実測図 (1/60)	21
第16図	S I 498・S I 592実測図 (1/80)	22
第17図	S K 110・S T 92・S K 17実測図 (1/40)	23
第18図	S T 383・S T 562実測図 (1/40)	24
第19図	出土遺物実測図 1 (1/2・1/4)	25
第20図	出土遺物実測図 2 (1/2・1/4)	26
第21図	出土遺物実測図 3 (1/2・1/4)	27
第22図	出土遺物実測図 4 (1/2・1/4)	28
第23図	出土遺物実測図 5 (1/2・1/4)	29
第24図	出土遺物実測図 6 (1/2・1/4)	30
第25図	出土遺物実測図 7 (1/2・1/4)	31
第26図	古賀ノ上遺跡牧想定範囲図	47
第27図	時期別遺構配置図 (1/500)	48

表目次

第1表	出土遺物観察表 (1)	32
第2表	出土遺物観察表 (2)	33
第3表	出土遺物観察表 (3)	34
第4表	出土遺物観察表 (4)	35
第5表	出土遺物観察表 (5)	36
第6表	出土遺物観察表 (6)	37

図版目次

図版 1	1 調査区遠景（南西から）	7 S E 21鉄鏝出土状況（北西から）
	2 調査区遠景（北東から）	8 S E 100土層断面（南から）
図版 2	1 調査区近景（南から）	図版 7 1 S E 100完掘状況（南西から）
	2 調査区近景（南から）	2 S E 244完掘状況（南東から）
図版 3	1 田村屋敷北辺（西から）	3 S E 390 S E 582完掘状況（南東から）
	2 田村屋敷北辺土層観察箇所（北西から）	4 S E 390 S E 582完掘状況（北東から）
	3 田村屋敷西辺（北から）	5 S K 17完掘状況（北から）
	4 田村屋敷土塁トレンチ完掘状況（北西から）	6 S K 17完掘状況（南東から）
	5 S I 592完掘状況（南東から）	7 S K 110遺物出土状況（南東から）
	6 S B 610完掘状況（南東から）	8 S K 110遺物出土状況（西から）
	7 S B 620完掘状況（南東から）	図版 8 1 S K 110完掘状況（南西から）
	8 S B 630完掘状況（南東から）	2 S T 383遺物出土状況（北東から）
図版 4	1 S B 640完掘状況（北西から）	3 S T 383遺物出土状況（北西から）
	2 S I 19完掘状況（南東から）	4 S T 383完掘状況（西から）
	3 S I 19鍛冶炉検出状況（南西から）	5 S T 562遺物出土状況（西から）
	4 S I 19鍛冶炉土層断面（南から）	6 S T 562遺物出土状況（西から）
	5 S I 240床面検出状況（南から）	7 S T 562完掘状況（西から）
	6 S I 240カマド検出状況（南から）	8 S P 22銅製帯金具出土状況（西から）
	7 S I 242床面検出状況（南東から）	図版 9 1 S D 13完掘状況（西から）
	8 S I 242完掘状況（南東から）	2 S D 13土層断面（北から）
図版 5	1 S I 280床面検出状況（南東から）	3 S E 293土層断面（北から）
	2 S I 344床面検出状況（西から）	4 S E 293調査風景（北から）
	3 S I 344カマド検出状況（北西から）	5 S E 570馬骨出土状況（北東から）
	4 S I 420 S I 421完掘状況（南から）	図版 10 1 S E 570馬骨出土状況（南東から）
	5 S I 498床面検出状況（南東から）	2 S E 570馬骨出土状況（北西から）
	6 S I 498カマド遺物出土状況（南東から）	図版 11 出土遺物写真 1
	7 S I 498完掘状況（東から）	図版 12 出土遺物写真 2
	8 S B 20完掘状況（南から）	図版 13 出土遺物写真 3
図版 6	1 S B 200完掘状況（北西から）	図版 14 出土遺物写真 4
	2 S B 200完掘状況（南東から）	図版 15 出土遺物写真 5
	3 S B 200 P 1 土層断面（西から）	図版 16 出土遺物写真 6
	4 S D 18完掘状況（南東から）	図版 17 出土遺物写真 7
	5 S D 237土層断面（北西から）	図版 18 出土遺物写真 8
	6 S E 21完掘状況（北から）	図版 19 出土遺物写真 9

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本調査は、病院建設に伴う事前の発掘調査である。平成25年6月3日、医療法人三井会から、久留米市北野町中川900-1、901-1、910外における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である古賀ノ上遺跡内にあたり、今回の調査地においても、古代の集落遺跡に伴う遺構が残存している可能性があると考えられたため、同年6月14日、発掘調査が必要である旨を回答した。7月22日に医療法人三井会より、発掘調査の依頼と文化財保護法第93条の届出が提出され、それを受けて久留米市長植原利則と医療法人三井会理事長神代弘道は、開発原因者が費用負担することを合意し、平成25年8月9日付けで埋蔵文化財発掘調査委託業務における協定および委託契約を取り交わした。久留米市教育委員会は、同年8月27日より、発掘調査を開始し、翌平成26年1月20日に現地での発掘調査を終了し、同年3月31日まで遺物整理作業を実施した。平成26年4月30日には、協定に基づき、平成26年度分の埋蔵文化財発掘調査報告書作成業務における委託契約を取り交わし、翌平成27年3月31日まで遺物整理および報告書作成作業を実施した。

なお、発掘調査面積は2,400㎡である。

2. 調査の体制

平成25年度

委託者：医療法人三井会 理事長 神代弘道

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部 長：野田 秀樹

次 長：佐藤 光義

文化財保護課 課 長：園井 正隆

課長補佐兼課主査：宮崎 俊一、白木 守

事務主査：塚本 映子

庶務担当：豊福 早苗

調査担当：江頭 俊介

整理担当：古賀 和子、丸山裕見子

平成26年度

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部 長：野田 秀樹

次 長：竹村 政高

文化財保護課 課 長：園井 正隆

課長補佐：宮崎 俊一、白木 守（兼課主査）

事務主査：塚本 映子

庶務担当：豊福 早苗

発掘調査臨時職員

青木佐智子、荒巻隆憲、石井弘子、石橋英治、石橋康子、石橋良一、井上知義、江藤光男、大熊澄子、大塚ヒロ子、大坪進、鐘江清、國武三歳、古賀勝治、小西富美子、佐田農夫男、杉山光恵、高橋正隆、田中真弓、田村広美、堤淳子、原敏男、日吉政勝、溝上国男、桃崎恭司、森山美千代、柳鈴子、山口誠也、山下洋子

発掘調査整理臨時職員

黒岩優子

【謝辞】

田中正日子氏、宮崎伸二氏、高山美子氏（以上久留米市文化財専門委員）、田中良之氏（九州大学）（故人）、桃崎裕輔氏（福岡大学）、芝康次郎氏（奈良文化財研究所）、坂元雄紀氏（福岡県教育庁）、小林啓氏（九州歴史資料館）、赤川正秀氏（大刀洗町教育委員会）、松村一良氏（元久留米市教育委員会）、馬田弘稔氏（元福岡県教育庁）にご指導を賜った。

また、発掘調査開始前に、鹿島建設株式会社様、秋山建設様に一次掘削のご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

3. 調査の目的と経過

調査地は古賀ノ上遺跡の西端に所在する。弥生時代から中世の集落の状況、特にその中でも古代の状況を確認することを目的とした調査である。平成26年8月20日、鹿島建設株式会社による一次掘削が始まり、その立会いと、周辺の草刈り等の準備作業に入った。8月27日には発掘調査を開始し、重機による表土剥ぎを行った。北半部は植木畑であり、1mほど盛り土がある。盛り土直下のマイナス1m～1.2mで遺構面を検出した。南半部の現状は水田であり、北半部よりも0.7mほど現地表面が低い。0.3mほど耕作土を除去すると、直下から遺構面が検出された。北半部と南半部の検出面にレベル差はない。現地表から遺構面までは、現代の耕作土であり、遺構面までの間に自然堆積層は確認できない。遺構面はかなり削平されているものと考えられる。8月末から9月初旬にかけて大雨が続き、9月9日まで水抜きに追われた。その間、開発予定敷地内の東端にわずかに重なって破壊されてしまう予定の田村屋敷土塁および濠について測量・トレンチ調査を行った。9月10日から表土剥ぎを再開し、剥ぎ終わっている箇所から順次遺構検出を始めた。その後各遺構を調査し、記録を行った。12月4日に気球写真による全体撮影を行い、12月7日には一般向けの現地説明会を行った。12月20日に金島小学校の児童による遺跡見学会を実施した。翌平成26年1月20日に埋戻しを終了し、発掘調査を完了した。その後平成27年3月31日までは、遺物整理と報告書作成を行った。遺構実測はトータル・ステーションで行い、「遺構くんcubic」で編集した。記録写真は、カラーリバーサル・モノクロ6×7判で撮影した。

Ⅱ．位置と環境

久留米市は、九州の北部、筑後川の中流域にあたり、筑紫平野の中央に位置する。古代においては筑後国府や国分寺が置かれ、筑後地区の政治・経済・文化・宗教の中心を占めた。近世には、小早川氏、田中氏の代を経て、有馬氏二十一万石の城下町として栄えた。近代は軍都として、また繊維産業とゴム産業の街として栄え、現在まで県南の中核都市として発展している。

本調査区が位置する久留米市北野町は、久留米市の北部、筑後川の北岸に位置する。以前は三井郡北野町であり、平成17年に久留米市と合併した。町名は町の西部にある北野天満宮に由来する。北野天満宮は、平安末期創建と伝わり、荘園（北野庄）の管理と地域支配の拠点として誘致されたようである。北野町は筑後川とその支流である大刀洗川、陣屋川、小石原川の沖積作用によって形成された沖積平野であり、標高は8～11mを測る、おおむね平坦な地形をなしている。所々に自然堤防とみられる島状の微高地があり、その微高地上に縄文時代後期から現代までの生活痕跡が残されている。縄文時代後期から古墳時代前期にかけて営まれた良積遺跡は、本調査区から西方約1kmに位置し、拠点的な環濠集落として発展した遺跡である。生活に使用された土器、石器、木製品等を始め、朝鮮半島産の豊富な鉄製品や、西日本各地から交易によってもたらされた遺物が出土しており、筑後川の水運を活かした活発な交易が行われていたことを示している。このころまでは、良積遺跡からその南側の大城地区まで連なる一連の微高地に遺跡が多いが、古墳時代中期以降は本調査区を含む古賀ノ上遺跡あたりに集落の中心が移り、古代を経て、中世には再び町域全体の微高地上が生活の舞台となったようである。

本調査区が位置する北野町中川は、北野町の東端に位置し、小石原川の右岸に接する。秋月から久留米高良山に至る古道が残っており、秀吉が九州攻めの際に通過したことから、太閤道と呼ばれている。それ以前から道路の存在が考えられ、古くから筑前と筑後を結ぶ交通の要衝であったと思われる。

古代の主要遺跡との位置関係については、九州の政治の中心を担った大宰府が古賀ノ上遺跡の13.5km北西にあり、筑後国府は6km南西にある。また、小郡官衙遺跡は5km、上岩田遺跡は4.5km、下高橋官衙遺跡（下高橋馬屋元遺跡、下高橋上野遺跡）は3km北西に位置する。また、朝倉宮推定地である朝倉市志波地区や須川地区は、本調査区から10kmほど東にある。

本調査区が所在する小字「正後」付近は、箒の城遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地になっていたが、発掘調査の機会はなく、実態は不明であった。平成3年度に県営北野東部地区圃場整備事業に伴って、大字八重亀、大字中川一帯において試掘調査が行われた結果、大規模な遺跡であることが判明し、平成3年度から翌4年度にかけて古賀ノ上遺跡として33,800㎡が発掘調査された（第1次調査・第2次調査）。その結果、5世紀後半から7世紀にかけての竪穴住居、掘立柱建物などで構成される集落や、8世紀から9世紀にかけての官衙風の建物群等が検出された。本調査区から西鉄甘木線をはさんで西側の一帯に東西500m、南北300m以上にわたって広がる広大な遺跡であ

り、遺跡の南側には池田川が隣接している。この池田川は、筑後川の旧流路であると見られ、遺跡が機能していた当時は水路と陸路が交差する重要地点であったことがうかがえる。

古賀ノ上遺跡第1次と第2次の成果を概観してみると、古墳時代から古代の集落は北側のⅠ－A区や、西側のⅡ－A区に多く、古代の官衙的建物群は、遺跡中央のⅡ－B区とⅠ－B区で検出されている。西側のⅡ－A区の8世紀前半の竪穴住居S I 009の床面からは馬1頭分の上顎と下顎が出土している。中央西側のⅡ－B区の大型建物群は、四面廂建物、東西棟の長舎建物、総柱の倉庫、側柱の建物などがロの字形に並び、その中央の空閑地に方形の井戸があるという配置をなす。この建物群の遺物は全体として8世紀中ごろから後半に取り、その間に建て替えや増築などが二三次行われている。建物の詳細な変遷については明記されておらず、今後の検討を要する。中央東側のⅠ－B区では南面に廂が付く大型の掘立柱建物が検出されており、周囲には8世紀前半から中頃と見られる遺物が主体を占める土坑などがある。大型建物の時期は不明だが、掘方が方形を成すことや、周囲の遺構の時期が8世紀前半から中頃に収まることから、同時期である可能性がある。周囲の土坑S K 007出土遺物の中には、「岡」や「寺」と書かれた筭書きの土師器などがある。北側のⅠ－A区では、南北棟の掘立柱建物が多く建ち並び、井戸の中から8世紀中頃から後半にかけての土師器で「兵」や「内部?」「東」と書かれた墨書土器が出土している。

官衙的な大型建物群や、「兵」墨書土器の存在などから、古賀ノ上遺跡は軍団の可能性が指摘されている。また、交通の要衝であることから、駅の可能性や、郷衙、私寺とみる意見もある。さらには御井郡の筑後川北岸における拠点とみる向きもあり、その機能や性格が今後解明されることが望まれている遺跡である。第1次調査と第2次調査では、資料整理や報告書作成体制が混乱していたことから、遺構の時期や変遷について明らかにされておらず、遺跡の性格付けが不十分である。そのため、今回の調査成果も含め、事実関係の整理と性格付けを行う必要がある。

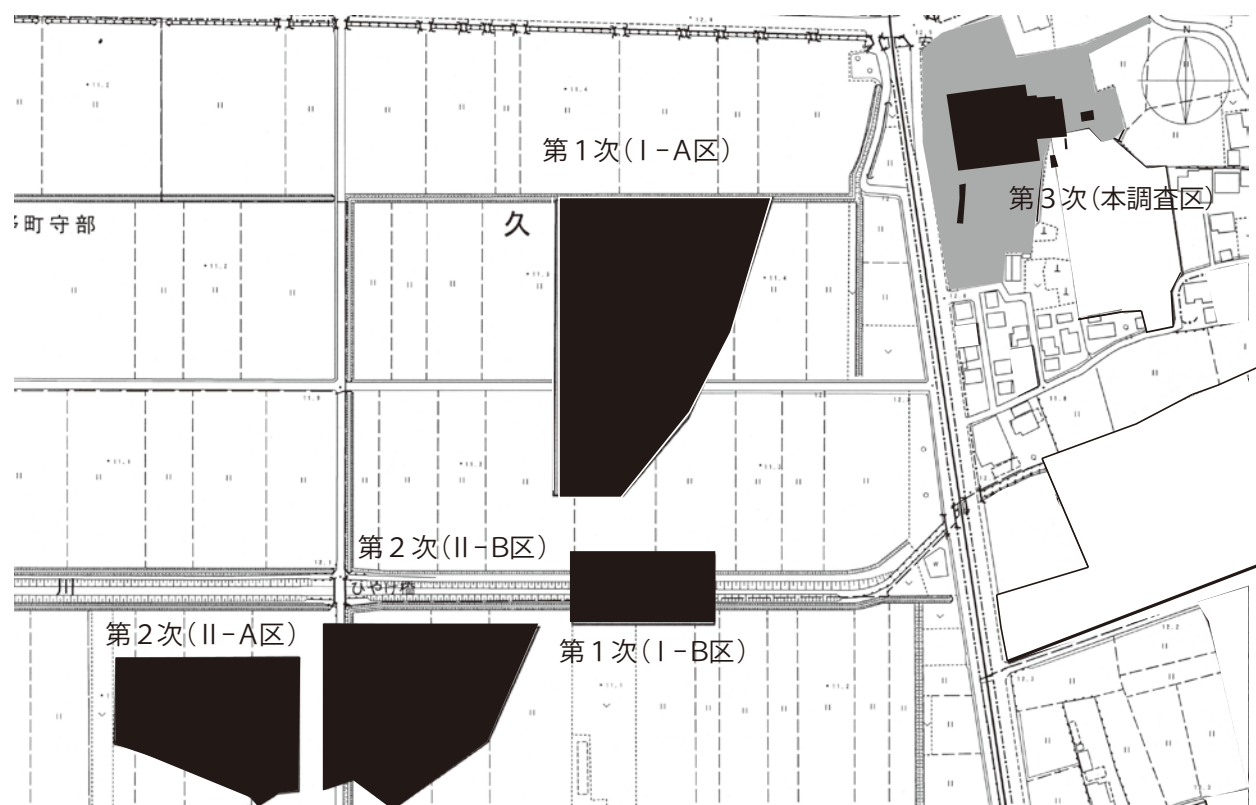
番号	遺跡名	主な時代
1	古賀ノ上遺跡 第3次調査	弥生、古墳、歴史
2	餅田遺跡	弥生
3	八勝負遺跡	弥生
4	石町遺跡	弥生、古墳
5	定格遺跡	古墳、歴史
6	良積遺跡	縄文、弥生、古墳、歴史
7	稲敷遺跡	弥生、古墳、歴史
8	仁王丸遺跡	弥生、古墳
9	今寺遺跡	弥生、古墳
10	大城小学校校庭遺跡	弥生、古墳
11	塚島遺跡	弥生、古墳
12	古賀ノ上遺跡 第1次・2次調査	古墳、歴史
13	中木戸遺跡	古墳、歴史



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/2500)



第2図 古代の主要遺跡位置図 (1/200,000)



第3図 古賀ノ上遺跡第3次調査区配置図 (1/5,000)

Ⅲ. 調査の記録

1. 検出遺構

今回の調査では、弥生時代の竪穴住居 1 棟、古墳時代の掘立柱建物 5 棟、竪穴住居 11 棟、井戸 1 基、古代の掘立柱建物 2 棟、溝 2 条、井戸 7 基、土坑 3 基、土壇墓 3 基、中世の溝 2 条、井戸 3 基、時期不明の溝 6 条、土坑 2 基、その他各時代のピットなどが検出された。

以下に主要遺構について述べる。

弥生時代の遺構

竪穴住居

S I 592 (第 4・16 図)

調査区中央北側で検出した。長軸 8.1m、短軸 6.2m、深さ 0.3m の円形の竪穴住居である。古墳時代の竪穴住居 S I 498 より先行する。床面中央より北西側に炉穴とみられる土坑がある。支柱穴は不明である。遺物は、弥生時代中期初頭の土器が多く出土している。

古墳時代の遺構

掘立柱建物

S B 533 (第 4・5 図)

調査区中央北寄りで検出した 2 間×1 間の掘立柱建物である。軸は N-44° -W である。南北辺は 2 間、東西辺は 1 間をとり、柱間は南北辺で 1.27m×2 間、東西辺で 2.38m×1 間である。出土遺物はない。軸方向から、古墳時代の竪穴住居に伴うものとみられる。

S B 610 (第 4・5 図)

調査区中央北寄りで検出した 2 間×1 間の掘立柱建物である。軸は N-40° -W である。南北辺は 2 間、東西辺は 2 間をとり、柱間は南北辺で 1.45m×2 間、東西辺で 1.34m×2 間である。出土遺物はない。軸方向から、古墳時代の竪穴住居に伴うものとみられる。

S B 620 (第 4・6 図)

調査区中央北寄りで検出した 2 間×1 間の掘立柱建物である。軸は N-34° -W である。南北辺は 2 間、東西辺は 1 間をとり、柱間は南北辺で 1.27m+1.07m、東西辺で 2.11m×1 間である。出土遺物はない。軸方向から、古墳時代の竪穴住居に伴うものとみられる。

S B 630 (第 4・6 図)

調査区中央北寄りで検出した 2 間×2 間の掘立柱建物である。軸は N-36° -W である。南北辺は 2 間、東西辺は 2 間をとり、柱間は南北辺で 1.7m×2 間、東西辺で 1.54m×2 間である。出土遺物はない。軸方向から、古墳時代の竪穴住居に伴うものとみられる。

S B 640 (第 4・7 図)

調査区中央北寄りで検出した 2 間×1 間の掘立柱建物である。軸は N-25° -W である。南北辺は 2 間、東西辺は 1 間をとり、柱間は南北辺で 1.11m+1.11m、東西辺で 2.34m×1 間である。出土遺

物はない。軸方向から、古墳時代の竪穴住居に伴うものとみられる。

竪穴住居

S I 19 (第4・13図)

調査区西側で検出した長辺5.6m、短辺5.4mの方形の竪穴住居である。軸はN-41° -Wである。北壁中央にカマドを有する。北壁と東西壁の内側に壁溝を有する。埋土は黒褐色を呈する。残存する深さは0.3m程度であり、削平されている。主柱穴は4本確認している。6世紀後半頃の土師器と須恵器、製塩土器が出土している。

S I 240 (第4・14図)

調査区中央で検出した長辺3.9m、短辺3.3mの方形の竪穴住居である。軸はN-19° -Wである。北壁中央にカマドを有する。埋土は黒褐色を呈する。残存する深さは0.12m程度であり、削平されている。主柱穴は4本確認している。S I 241とS I 240に後出する。6世紀後半頃の土師器、須恵器、碗形の鉄滓などが出土している。

S I 241 (第4・14図)

調査区中央で検出した長辺5.1m、短辺4.0mの方形の竪穴住居である。軸はN-34° -Wである。埋土は黒褐色を呈する。残存する深さは0.1m程度であり、削平されている。S I 240より先行し、S I 242より後出する。6世紀後半頃の土師器と須恵器が出土している。

S I 242 (第4・14図)

調査区中央で検出した長辺5.7m、短辺5.4mの方形の竪穴住居である。軸はN-40° -Wである。埋土は黒褐色を呈する。残存する深さは0.25m程度であり、削平されている。主柱穴は4本確認している。床下に湿抜きのための暗渠状の掘り込みを有する。S I 240とS I 241より先行する。6世紀末頃とみられる土師器と須恵器が出土している。

S I 280 (第4・14図)

調査区中央南寄りで検出した長辺5.9m、短辺5.7mの方形の竪穴住居である。軸はN-35° -Wである。北壁中央にカマドを有する。埋土は黒褐色を呈する。残存する深さは0.26m程度であり、削平されている。S D 13より先行する。7世紀中頃の土師器、須恵器、轡の刃口片、鉄製の馬具の飾り金具などが出土している。

S I 344 (第4・15図)

調査区中央南寄りで検出した長辺4.8m、短辺4.2mの方形の竪穴住居である。軸はN-26° -Wである。北西角にカマドを有する。埋土は黒褐色を呈する。残存する深さは0.16m程度であり、削平されている。床下に湿抜きのための暗渠状の掘り込みを有する。S B 200より先行する。7世紀前半から中頃とみられる土師器と須恵器が出土している。

S I 420 (第4・15図)

調査区西側で検出した長辺4.4m、短辺4.0mの方形の竪穴住居である。軸はN-22° -Wである。北壁中央にカマドを有する。埋土は黒褐色を呈する。残存する深さは0.12m程度であり、削平されて

いる。支柱穴は4本確認している。床下に湿抜きのための暗渠状の掘り込みを有する。S I 421より後出する。6世紀～7世紀とみられる土師器と須恵器が出土している。

S I 421 (第4・15図)

調査区西側で検出した南北辺長4.8m、東西辺長不明の方形の竪穴住居である。軸はN-32° -Wである。埋土は黒褐色を呈する。残存する深さは0.14m程度であり、削平されている。床下に湿抜きのための暗渠状の掘り込みを有する。S I 420より先行する。

S I 498 (第4・16図)

調査区中央で検出した長辺5.7m、短辺5.2mの方形の竪穴住居である。軸はN-34° -Wである。北壁中央にカマドを有する。埋土は黒褐色を呈する。残存する深さは0.06m程度であり、大幅に削平されている。支柱穴は4本確認している。床下に湿抜きのための暗渠状の掘り込みを有する。S I 592により後出する。6世紀後半頃の土師器と須恵器が出土している。

S I 646 (第4図)

調査区東側で検出した規模不明の方形の竪穴住居である。攪乱によって大部分が失われている。軸はN-28° -Wである。北壁中央にカマドを有する。埋土は黒褐色を呈する。残存する深さは0.05m程度であり、大幅に削平されている。S D 13より先行する。出土遺物はない。

S I 647 (第4図)

調査区東側で検出した規模不明の方形の竪穴住居である。攪乱によって大部分が失われている。軸はN-26° -Wである。埋土は黒褐色を呈する。残存する深さは0.12m程度であり、大幅に削平されている。床下に湿抜きのための暗渠状の掘り込みを有する。出土遺物はない。

井戸

S E 593 (第4・8図)

調査区北側で検出した直径2.8mの円形の井戸である。深さは1m以上であり、安全確保のため完掘していない。6世紀後半頃の遺物を含む。

古代の遺構

掘立柱建物

S B 20 (第4・7図)

調査区西側南寄りで検出した2間×2間の掘立柱建物である。軸はN-3.8° -Wである。柱間は南北辺で1.75m×2間、東西辺で2.0m×2間である。軸方向はS B 200と共通する。S E 21より後出する。8世紀中頃の土師器、須恵器、碗形の鉄滓、製塩土器などが出土している。

S B 200 (第4・12図)

調査区中央南寄りで検出した4間×4間の掘立柱建物である。軸はN-3.8° -Wである。柱間は南北辺で1.6m×4間、東西辺で2.34m+2.19m+2.26m+2.42mである。軸方向はS B 20と共通する。S I 280、S I 344より後出する。7世紀第4四半期～8世紀第2四半期までの土師器、須恵器、砥石などが出土している。

溝

SD18 (第4図)

調査区西側南寄りで検出した長さ14m、上端幅0.6mの溝である。軸はN-35° -Wである。深さは0.38mである。SD13より先行する。8世紀代の土師器、須恵器の小片が出土しているが、図示できるものはない。

SD237 (第4図)

調査区中央南寄りで検出した長さ5.9m、上端幅0.7mの溝である。軸はN-38° -Wである。深さは0.48mである。SD13より先行する。7世紀後半の土師器、須恵器が出土している。

井戸

SE21 (第4・9図)

調査区西側で検出した長辺3.8m、短辺2.3mの方形の井戸である。軸はN-29° -Wである。深さは1.3mである。SB20より先行する。階段状に西側に向かって深くなっている。7世紀末から8世紀初頭の遺物を含む。鉄鏝が出土している。

SE100 (第4・9図)

調査区東側で検出した直径2.2mの円形の井戸である。深さは1.7mである。SB20より先行する。最深部が2段あり、掘り直しの可能性がある。8世紀第2四半期ごろの遺物を含む。土師器の仏具などが出土している。

SE244 (第4・10図)

調査区南側で検出した長軸3.1m、短軸1.6mの楕円形の井戸である。軸はN-8° -Wである。深さは1.3mである。SE247より先行する。階段状に南側に向かって深くなっている。7世紀後半の遺物を含む。鉄製の小札、刀子、碗形の鉄滓、壁土などが出土している。

SE247 (第4・10図)

調査区南側で検出した直径1mの円形の井戸である。深さは1.3mである。8世紀第1四半期ごろの遺物を含む。SE244より後出する。

SE284 (第4・10図)

調査区南側で検出した直径1mの円形の井戸である。深さは1.2mである。8世紀第1四半期ごろの遺物を含む。SE244より後出する。

SE390 (第4・11図)

調査区南側で検出した直径1.5mの円形の井戸である。深さは1.0mである。7世紀後半の遺物を含む。SE582より先行する。外側に方形の浅い掘方を伴っており、SE582とともに方形井戸を成す可能性がある。

SE582 (第4・11図)

調査区南側で検出した長軸2.5m、短軸2.1mの楕円形の井戸である。深さは0.8mである。7世紀後半～8世紀第1四半期の遺物を含む。SE390、SD13より後出する。外側に方形の浅い掘方

掘方を伴っており、S E 390とともに方形井戸を成す可能性がある。S D 13によって上部を削平されている。

土坑

S K 17 (第4・17図)

田村屋敷西外側土塁確認トレンチで、土塁の下から検出した長軸1.5m、短軸0.6m、深さ0.5mの楕円形の土坑である。8世紀前半の遺物を含む。馬歯や製塩土器細片が出土している。

S K 110 (第4・17図)

調査区東側で検出した長軸3.8m、短軸2.3m、深さ1.0mの楕円形の土坑である。8世紀第2四半期の遺物を含む。土師器の仏具、「天」刻印のある土師器、壁土、転用硯、須恵器甕、製塩土器などが出土している。廃棄土坑と考えられ、S B 200建物の使用者に関わる遺構である可能性がある。

S K 311 (第4図)

調査区南側で検出した長軸1.7m、短軸0.5m、深さ0.2mの楕円形の土坑である。製塩土器が出土している。

S K 385 (第4・17図)

調査区東側で検出した長軸1.4m、短軸0.5m、深さ0.5mの楕円形の土坑である。北壁を横穴状に掘りぼめている。8世紀代の遺物を含む。S D 13によって上部を削平されている。

墳墓

S T 92 (第4図)

調査区南側で検出した長軸2.9m、短軸1.3m、深さ0.1mの方形の土墳墓である。軸はN-93°-Wである。8世紀第2四半期の遺物を含む。

S T 383 (第4・18図)

調査区東側で検出した長軸2.5m、短軸0.6m、深さ0.6mの方形の木棺墓である。軸はN-95°-Wである。8世紀第2四半期の遺物を含む。S D 13によって上部を削平されている。中層に藁灰が大量に堆積している。また、壁面に接して粘土が帯状に廻っており、木棺の残骸とみられる。

S T 562 (第4・18図)

調査区東側で検出した長軸3.8m、短軸1.5m、深さ0.2mの方形の土墳墓である。軸はN-82°-Wである。中位に7世紀後半の完形の須恵器蓋が2点重ねて埋置されており、副葬品と考えられる。

ピット

S P 22 (第4図)

調査区南側で検出した直径0.3m、深さ0.3mの円形のピットである。銅製の 鑄金具が出土している。

中世の遺構

溝



第4図 古賀ノ上遺跡第3次調査遺構配置図 (1/300)

調査区南側で検出した北辺44m、西辺40m、深さ0.6mの区画溝である。北辺は東側3分の一ほどがやや南へ屈曲する。西辺は中ほどから西側へ屈曲する。12世紀後半～13世紀前半ごろの遺物を含む。田村屋敷との関係は不明である。

S D 294 (第4図)

調査区東側検出した長さ10m、幅0.5m、深さ0.5mの溝である。S D 13と方向を同じくし、S D 13より後出することから、S D 13を掘り直した溝であると考えられる。

井戸

S E 285 (第4・12図)

調査区東側で検出した直径0.8m、深さ1.3mの円形の井戸である。12世紀後半ごろの遺物を含む。

S E 293 (第4・12図)

調査区東側の浄化槽設置予定区で検出した長軸3.1m、短軸2.3m、深さ1.3m以上の平面楕円形の井戸である。安全確保のため完掘していない。12世紀後半～13世紀前半ごろの遺物を含む。

S E 570 (第4・13図)

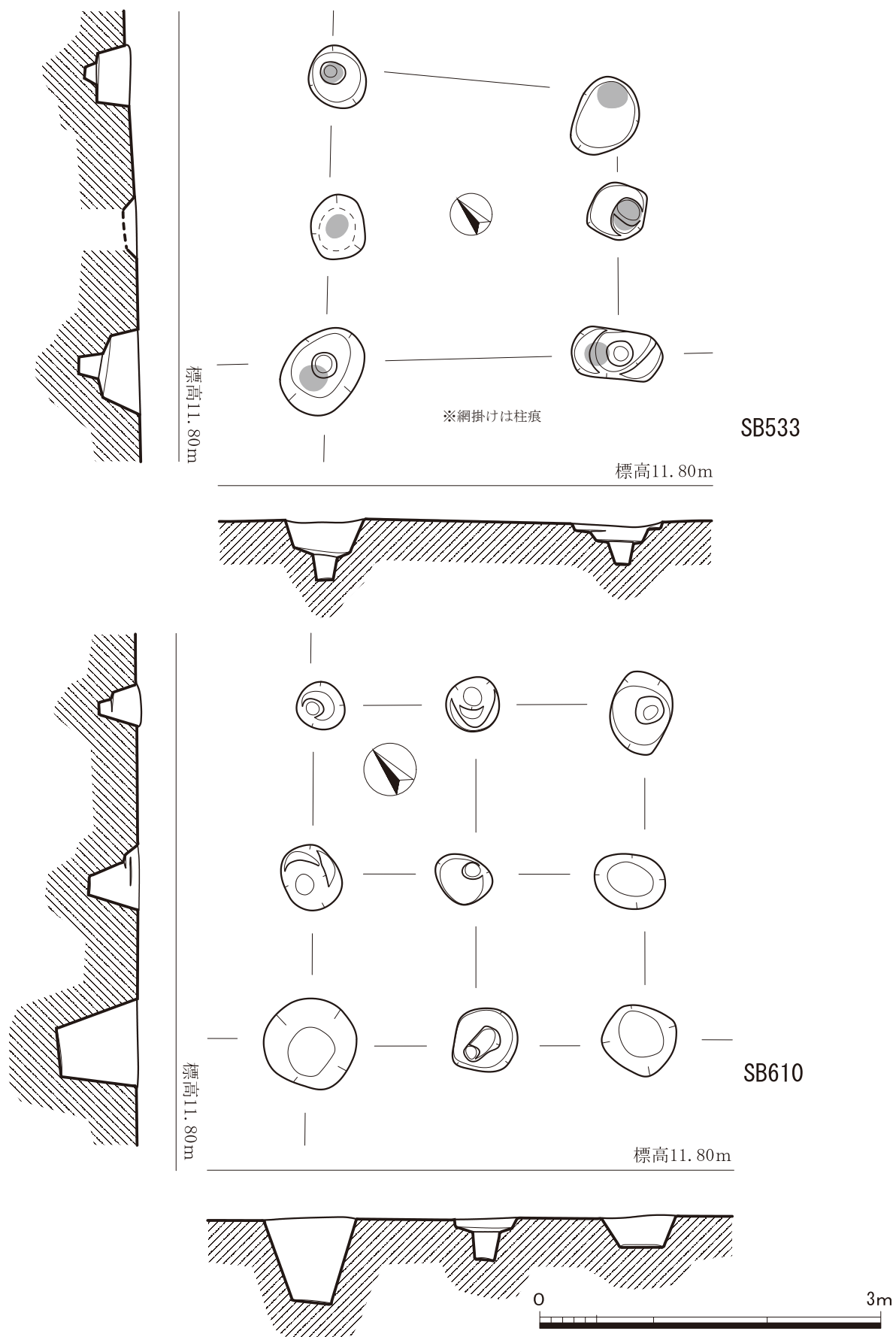
調査区東側で検出した直径2.4m、深さ1.0m以上の円形の井戸である。12世紀後半～13世紀前半ごろの遺物を含む。頭部以外の馬の骨格が出土している。頸部が井戸壁にもたれるように全身を横たえて埋置されており、頭部が最上位に位置するために、削平によって頭部を失っている可能性があるが、埋置する時点で切断した可能性もある。骨端が離れておらず、肉が付いたまま埋置されたものとみられる。雨乞い等の儀礼による産物と考えられる。井戸の壁より内側に鬼板（鉄分固着）が廻っており、当初素掘りの井戸として機能していたと考えられ、ある程度埋没した状態で、祭祀土坑として利用されたと判断される。

2. 出土遺物

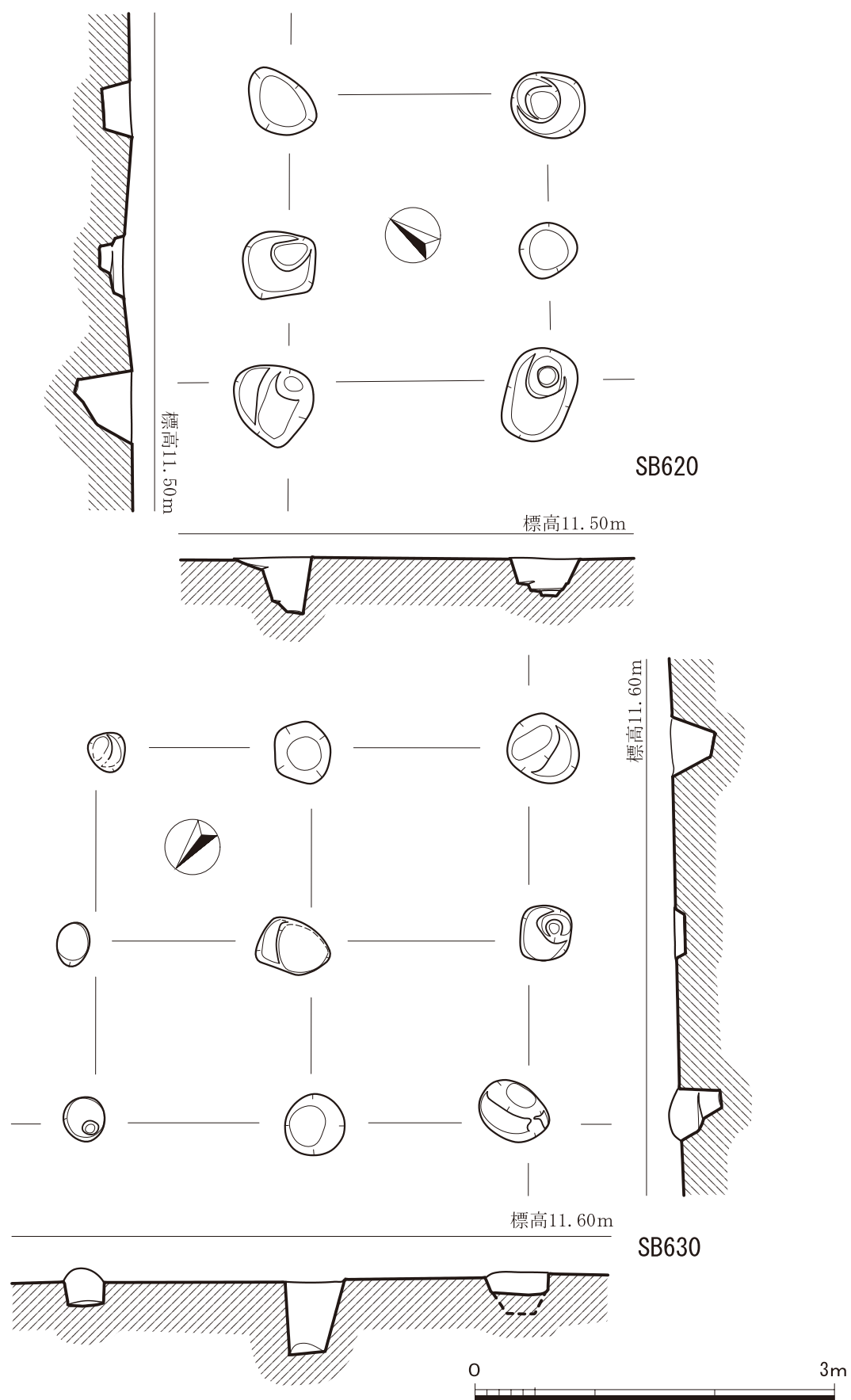
今回の調査では、弥生土器、製塩土器、土師器、須恵器、銅製品、鉄製品、石製品、馬骨など多様な遺物が出土した。遺物の総量はパンコンテナー30箱である。

特筆すべき遺物について述べる。その他各遺物の詳細は第1～4表の遺物観察表を参照願う。

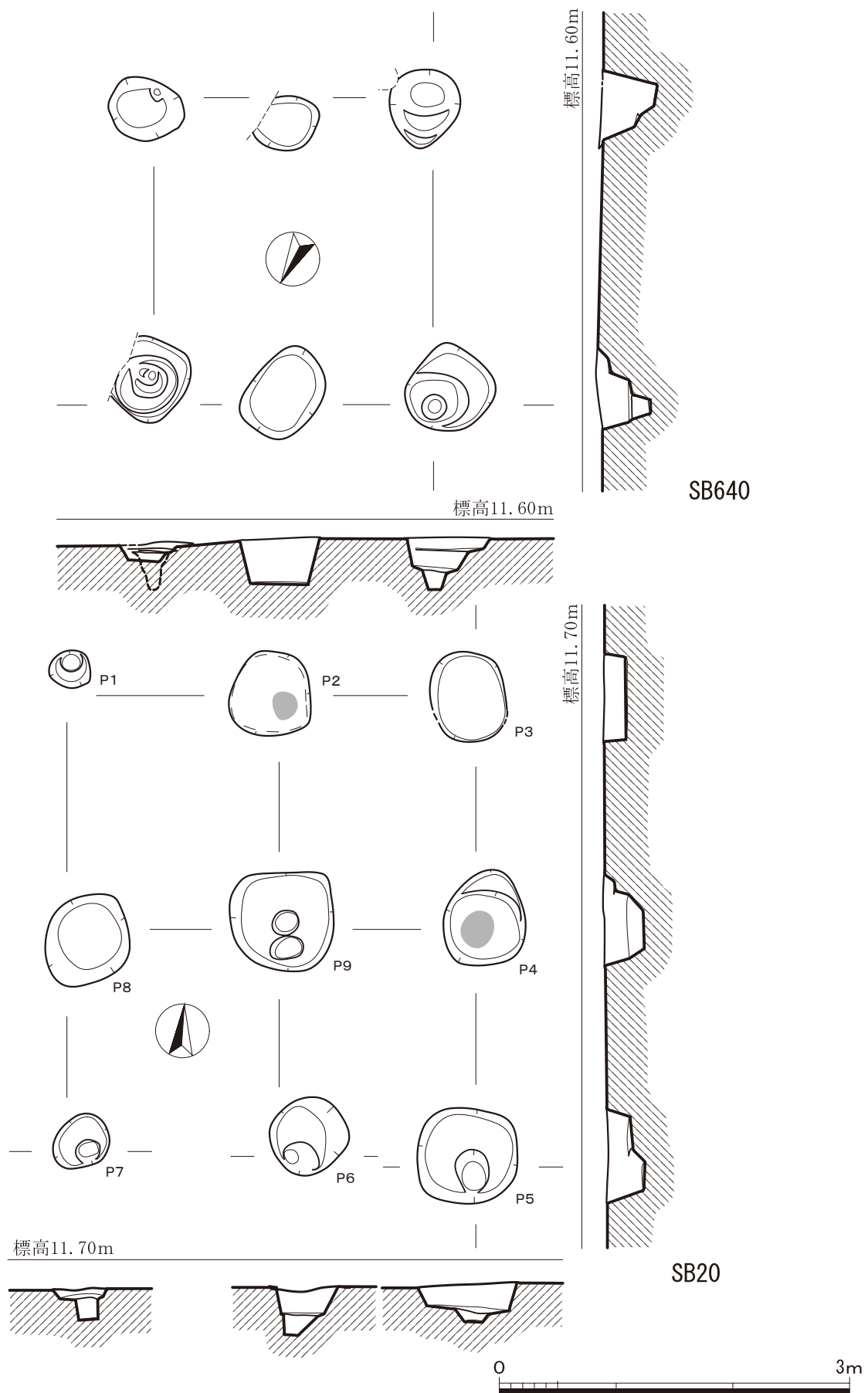
8世紀前半の遺構から仏具が出土しているため、ここに詳細を述べる。S E 100出土の土師器托(33)は、高坏の脚部の上に円盤状の台が乗り、台と脚の間に受け皿が付くような形状をしている。受け皿の部分は破損している。上部の台の上面には回転ヘラ切りの痕がみられ、脚部も回転ナデが内外面に施されることから、回転台を使用して成形されたものと考えられる。S K 110出土の土師器托(114)は、高坏の坏部内面に小型の皿が乗ったような形状を呈している。上部の皿部とその下の坏部と脚部はそれぞれつなぎあわせてナデつけている。坏部の口縁は破損している。内外面ともナデが施されているが、S E 100出土托(33)のような回転ナデではない。S K 110出土土師器鉄鉢(115)は、内外面を精巧に磨き上げて暗文を施している。内面の下半部は中心から外側へケズリを施している。



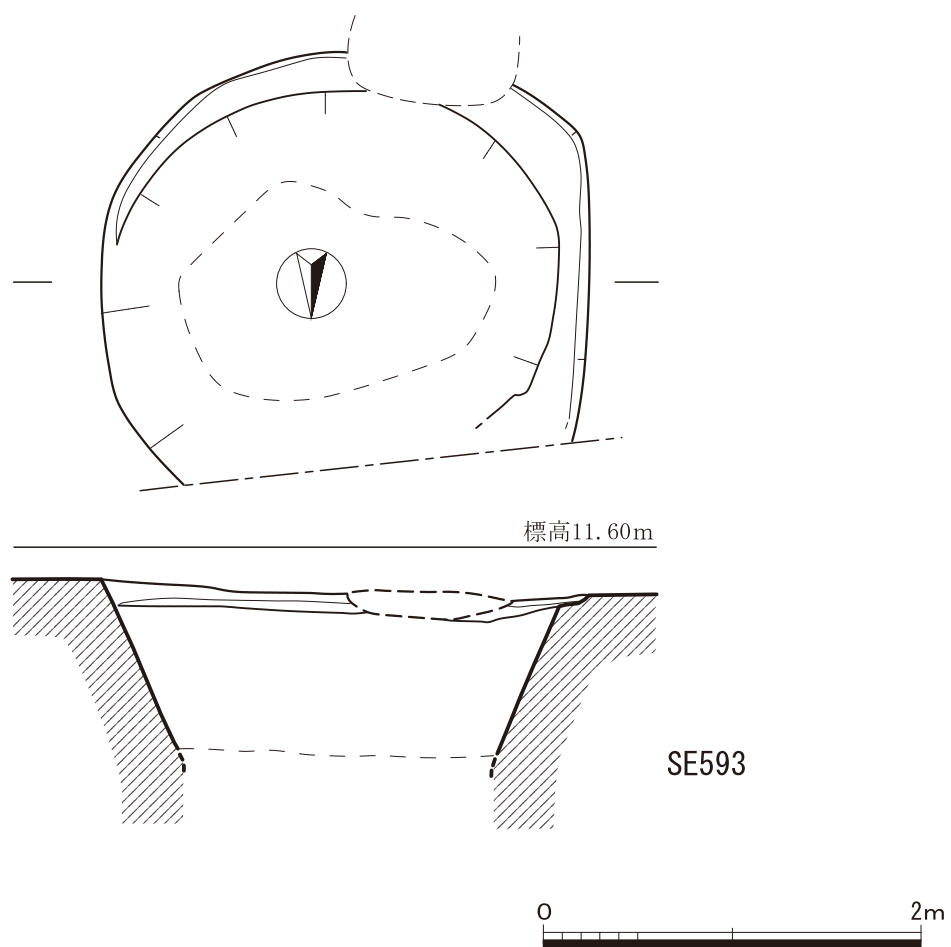
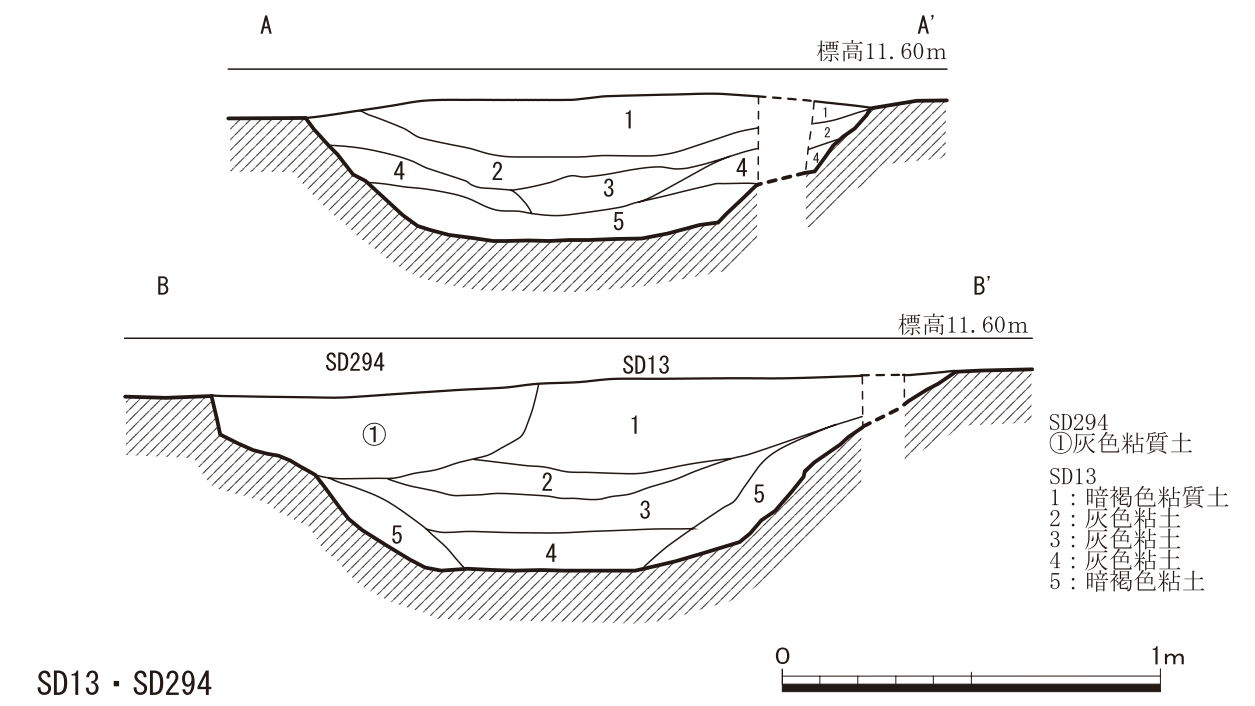
第5図 S B 533・S B 610実測図 (1/50)



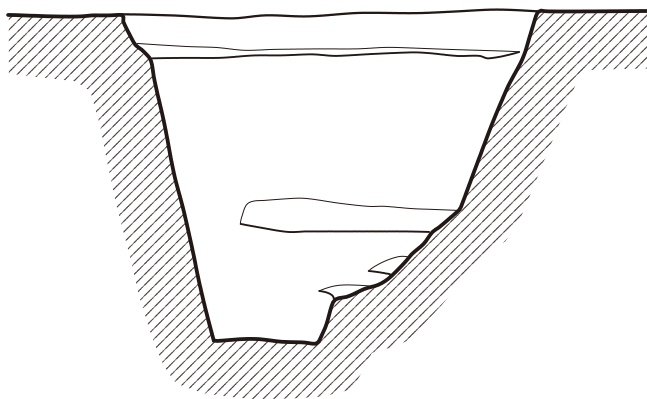
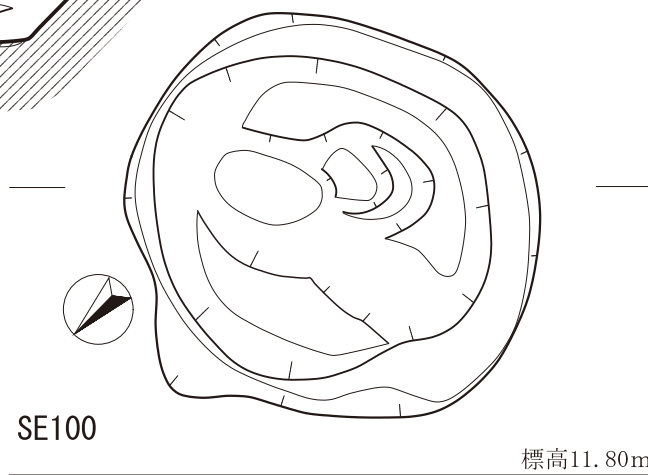
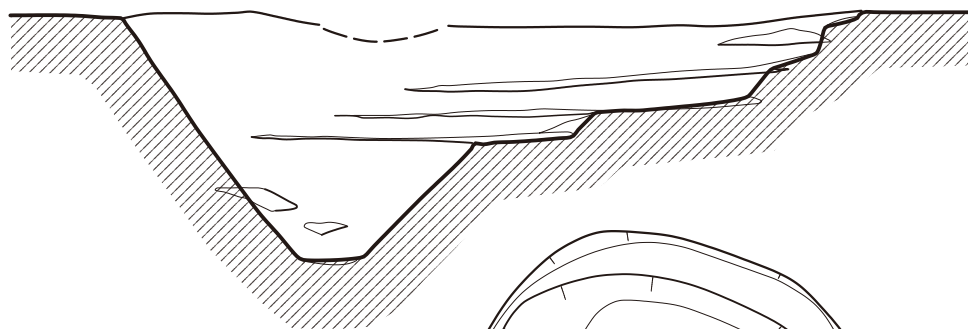
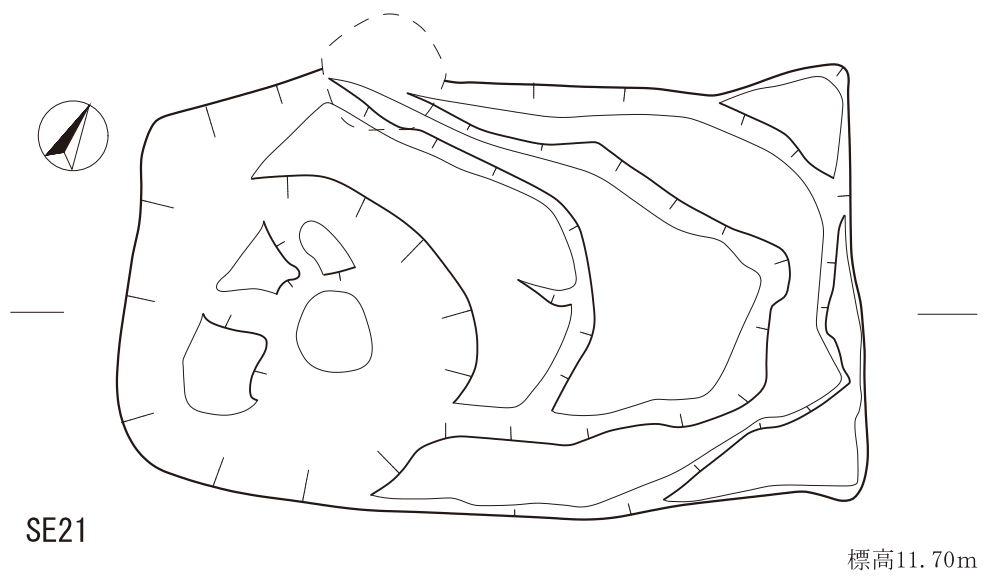
第6図 S B 620・S B 630実測図 (1/50)



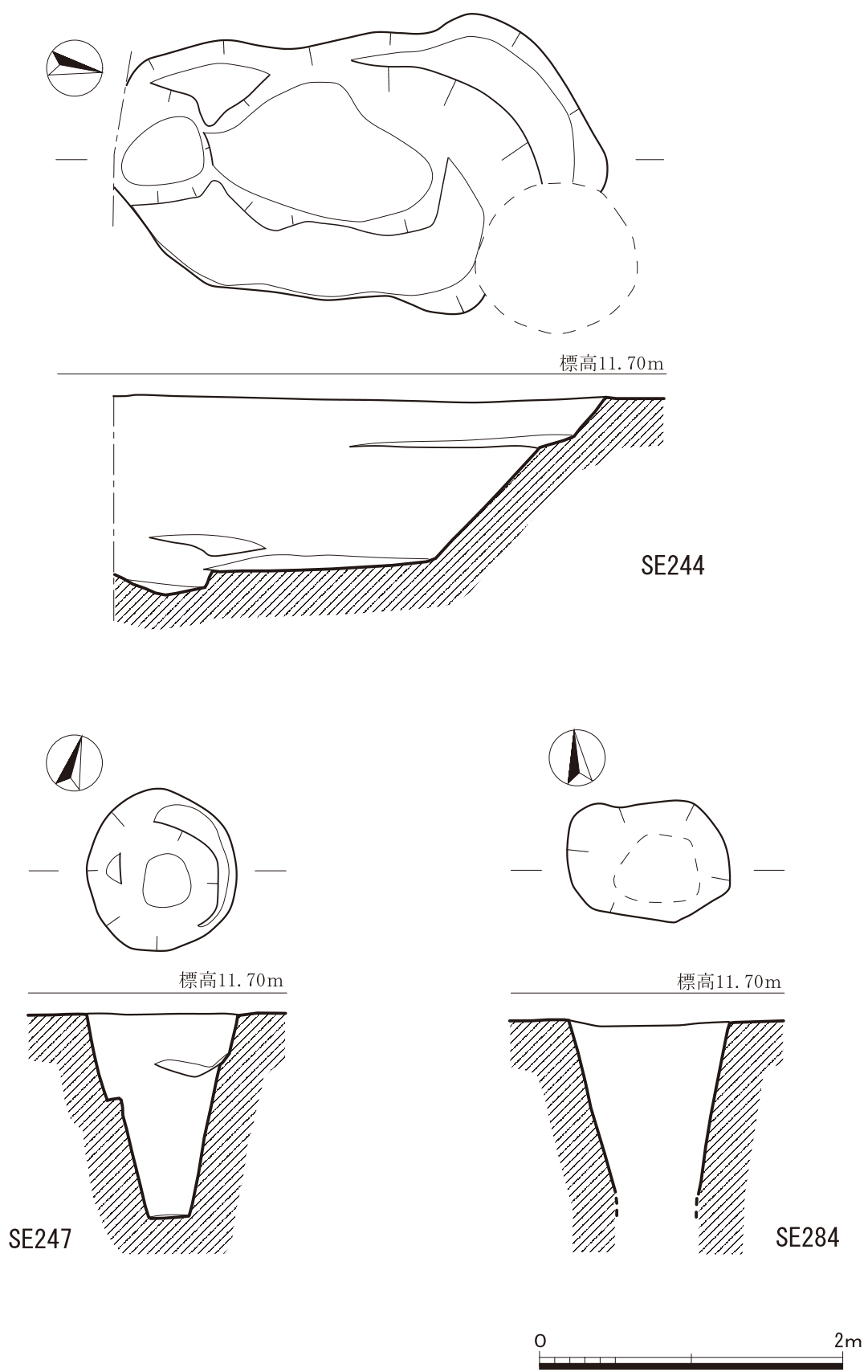
第7図 S B 640・S B 20実測図 (1/50)



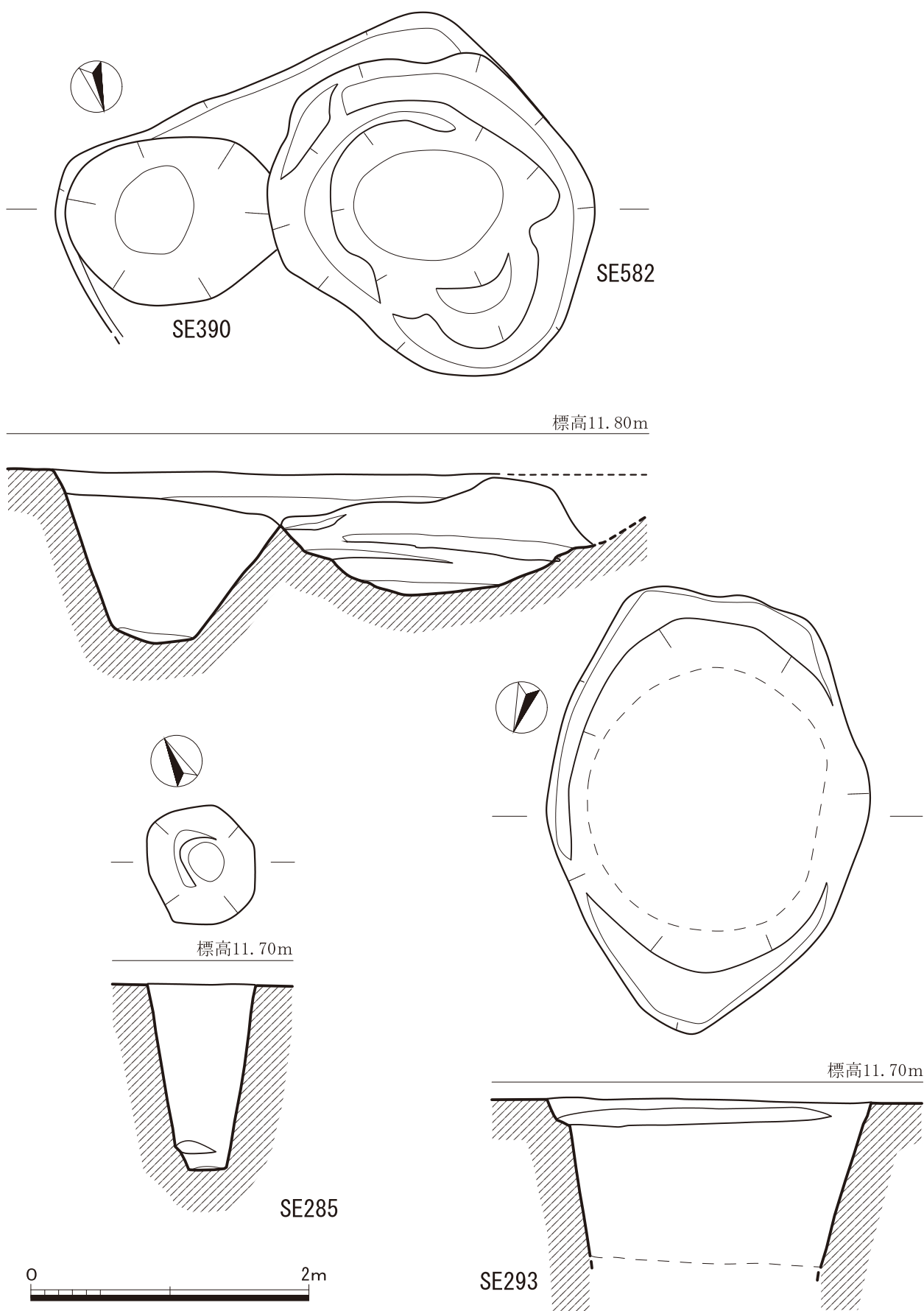
第8図 SD13・SD244・SE593実測図 (1/20・1/40)



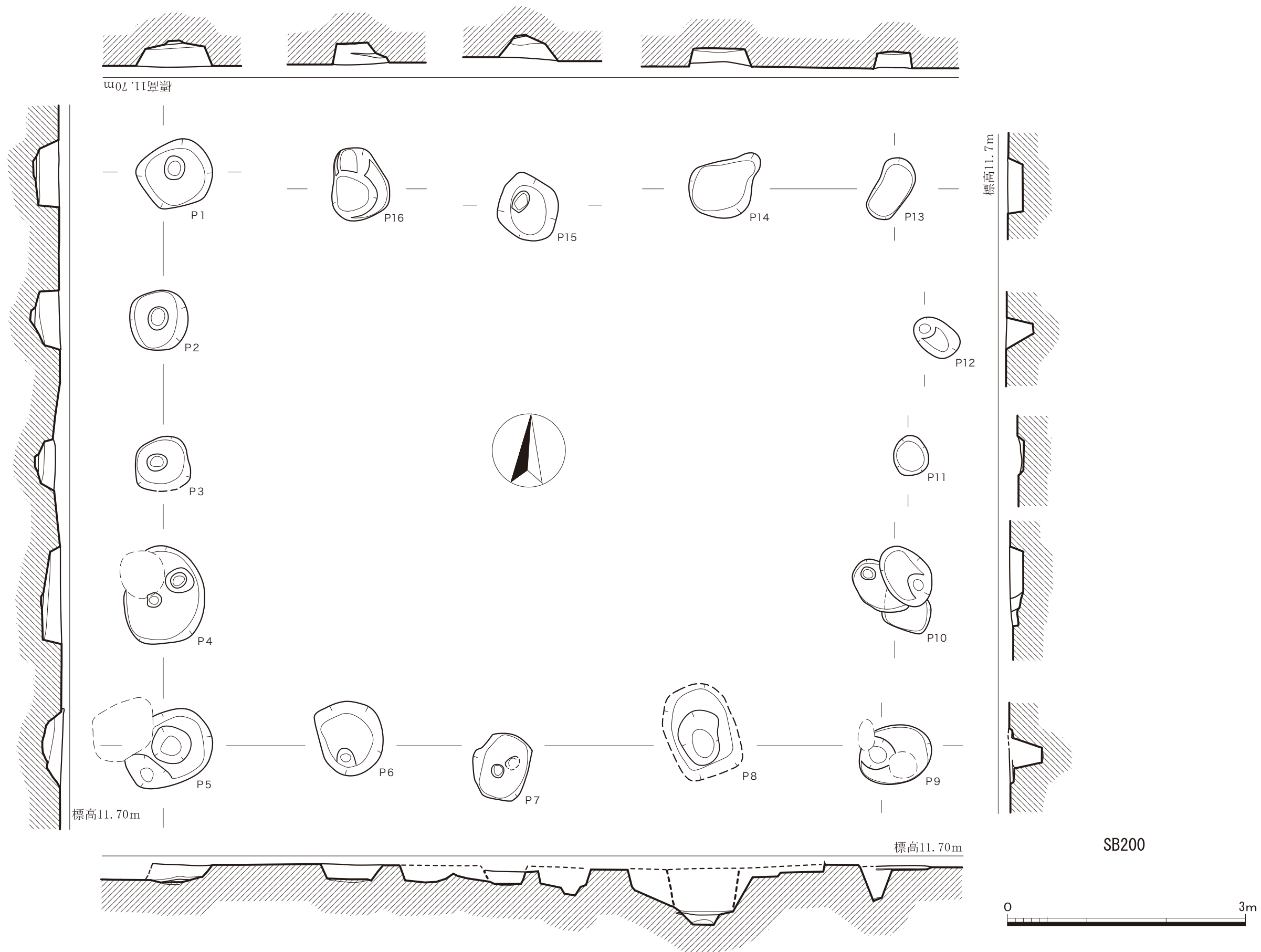
第9図 SE21・SE100実測図 (1/40)



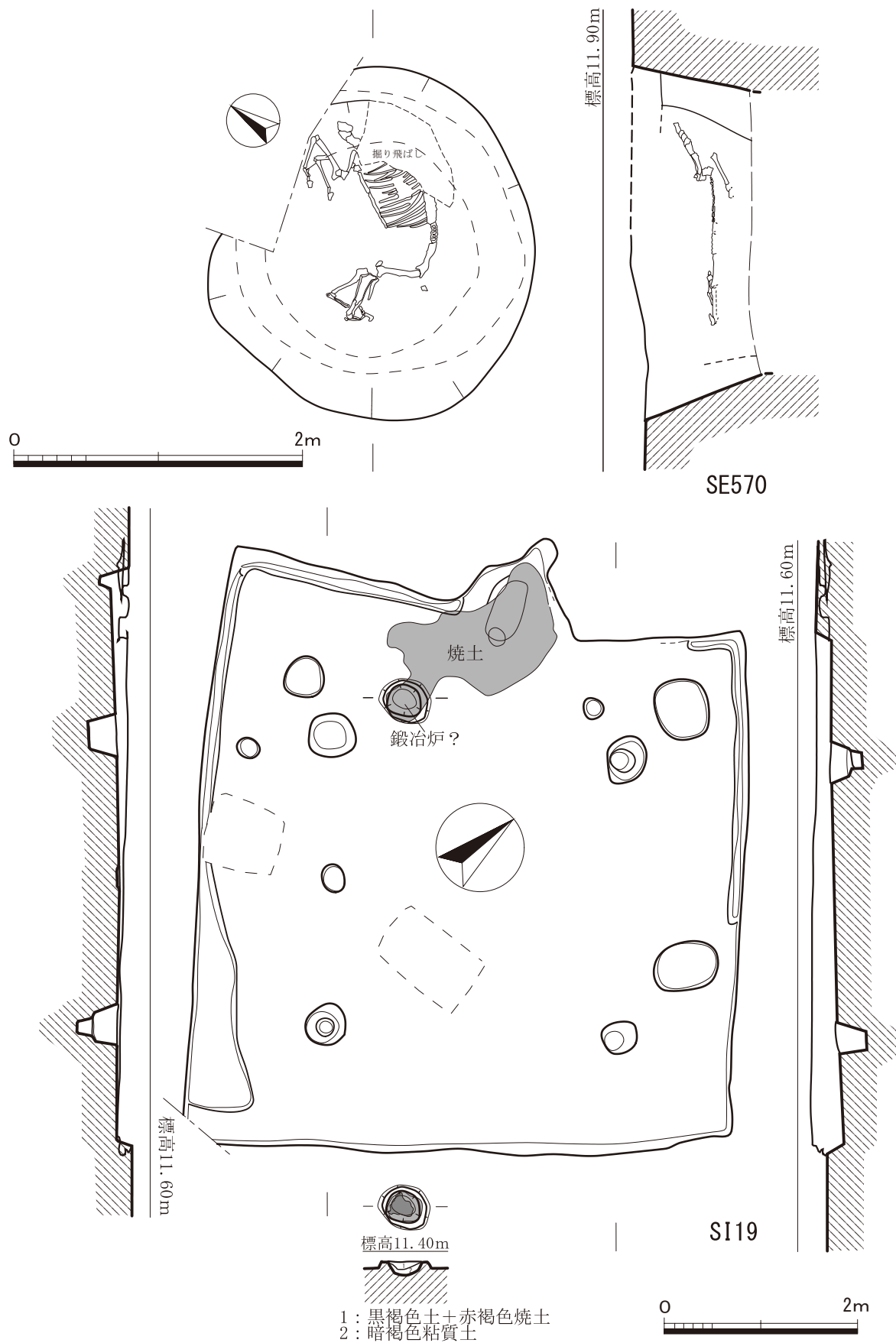
第10図 S E 244・S E 247実測図 (1/40)



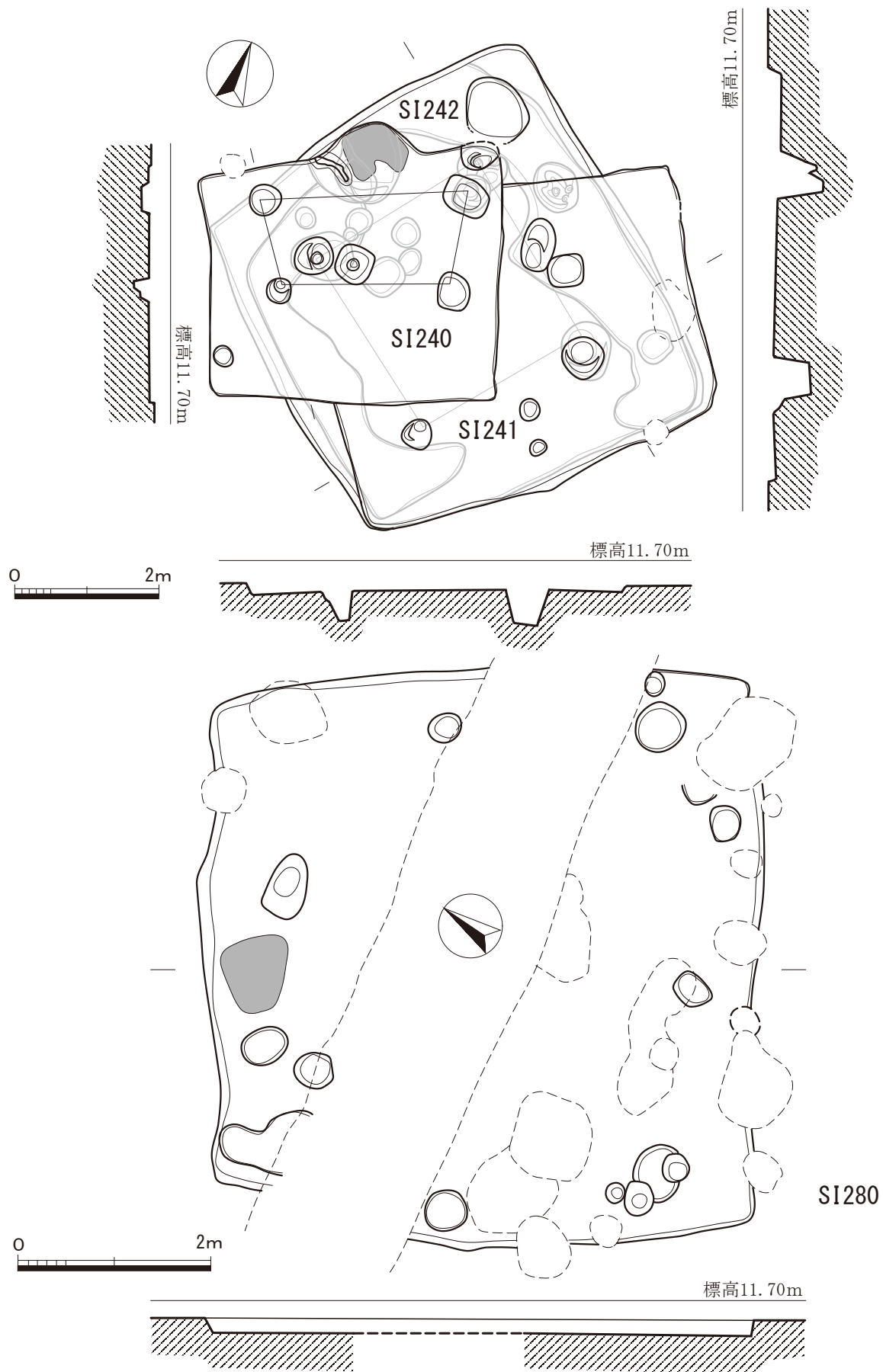
第11図 S E 390・S E 582・S E 285・S E 293実測図 (1/40)



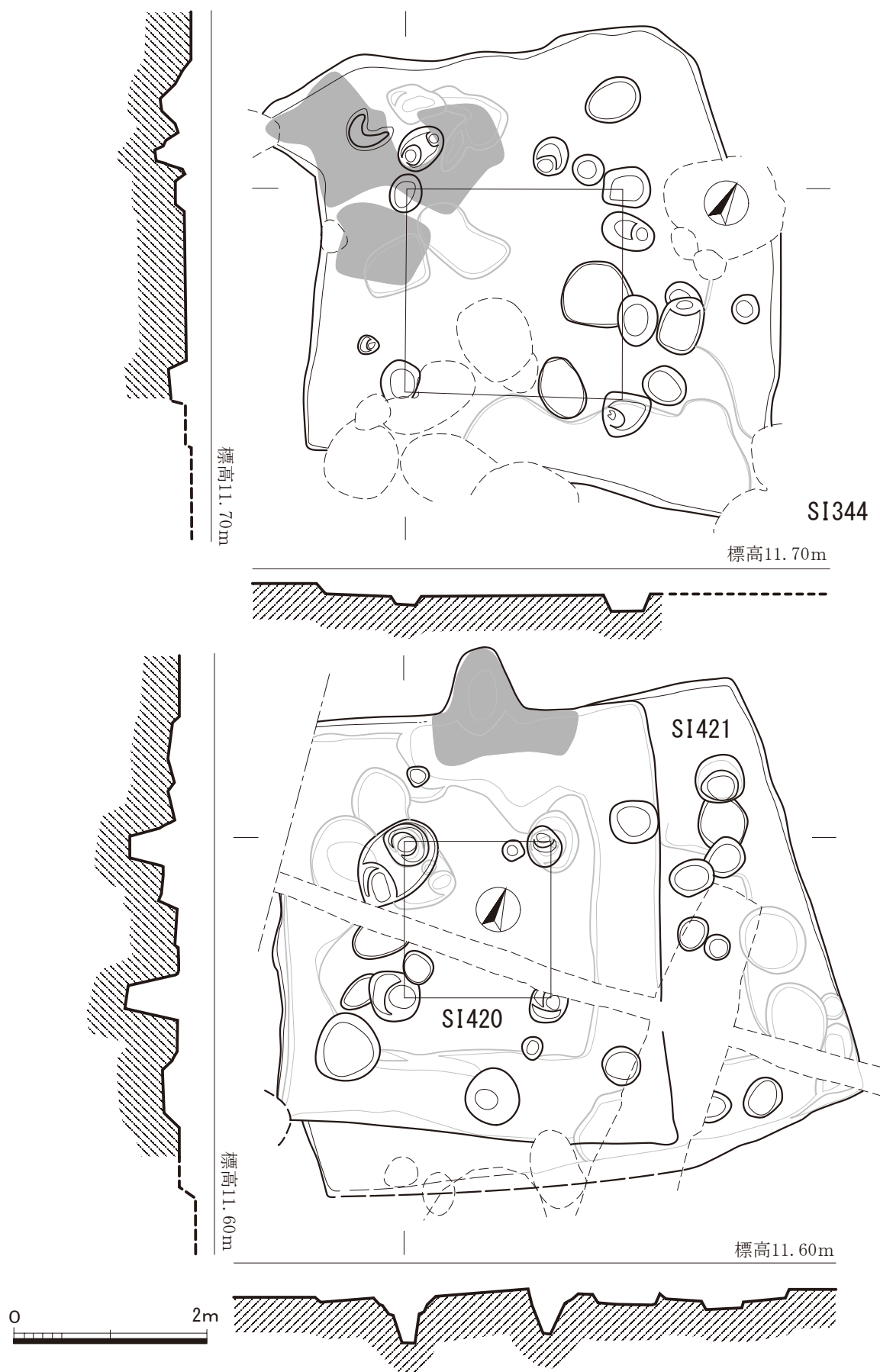
第12図 SB200実測図 (1/50)



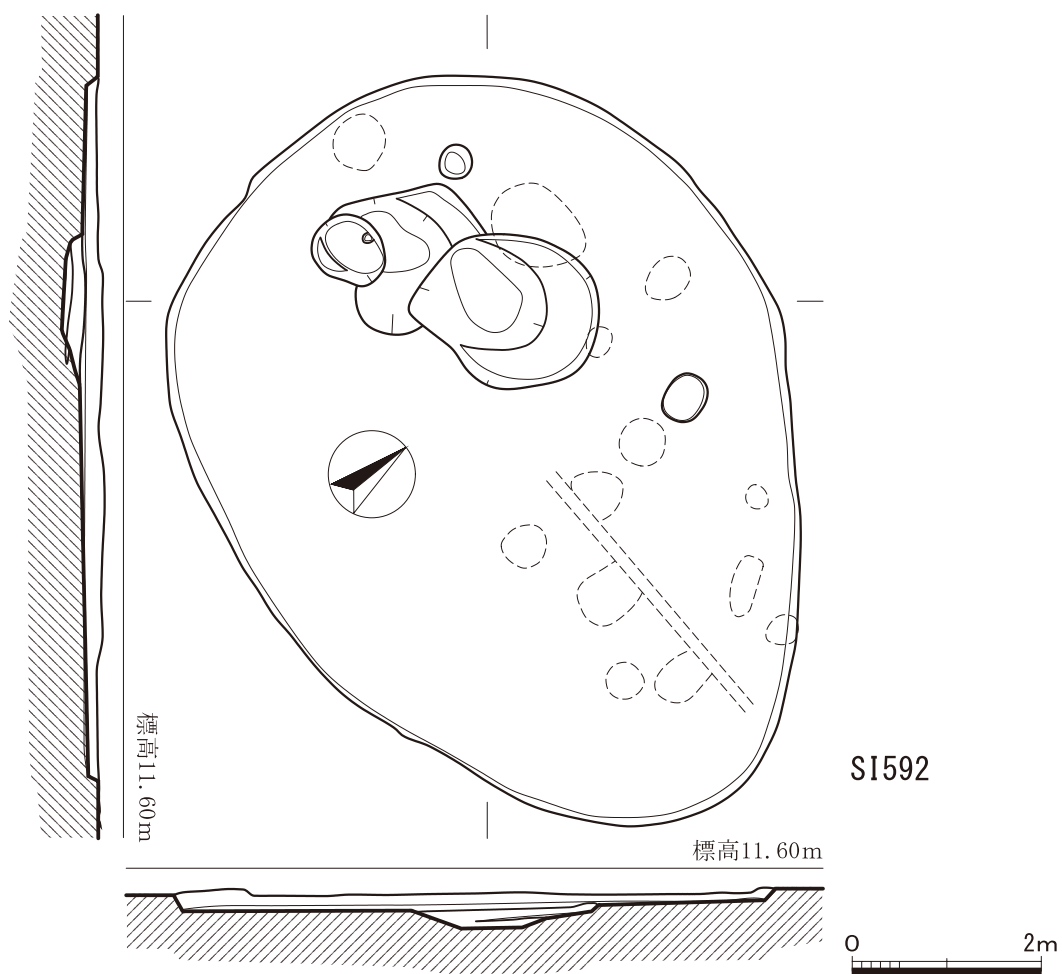
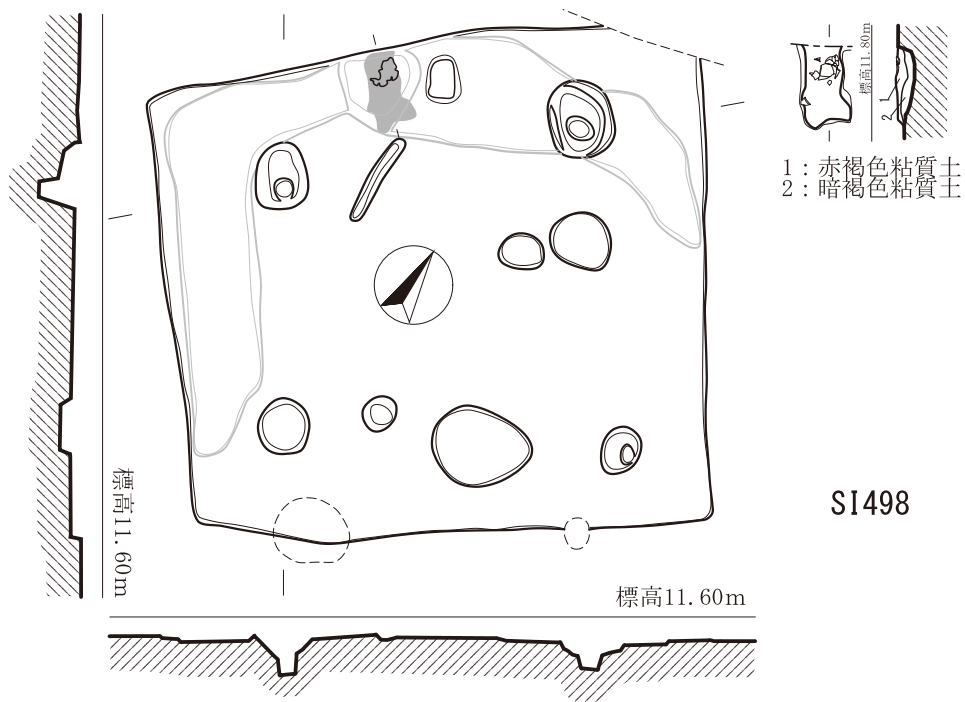
第13図 S E570・S E582・S I19実測図 (1/40・1/60)



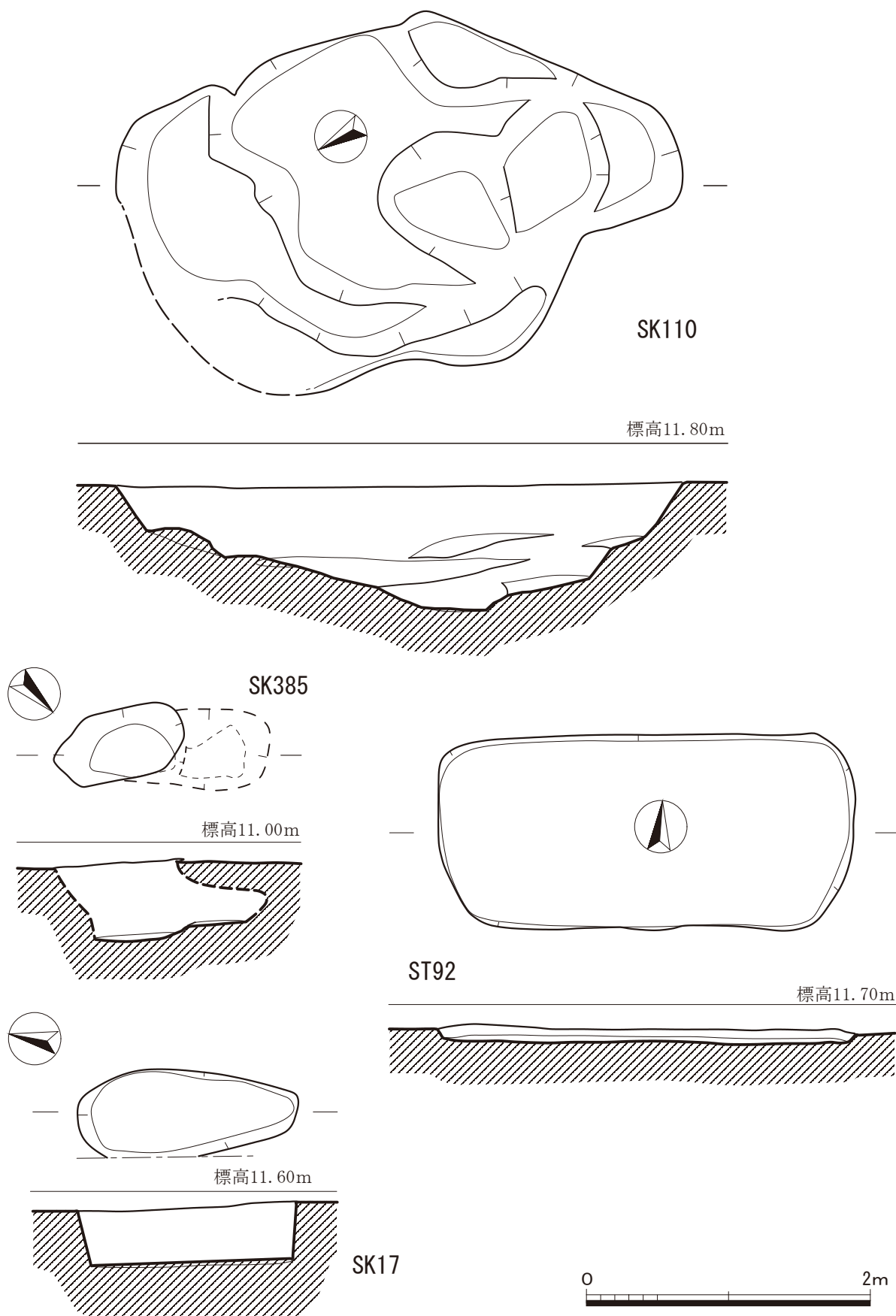
第14図 S I 240・S I 242・S I 280実測図 (1/80・1/60)



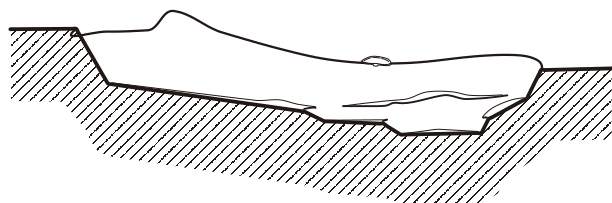
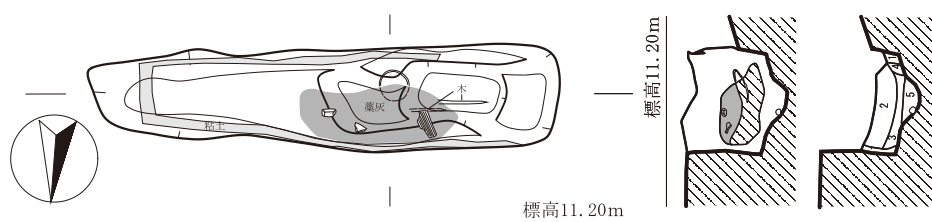
第15図 S I 344・S I 420・S I 421実測図 (1/60)



第16図 S I 498・S I 592実測図 (1/80)

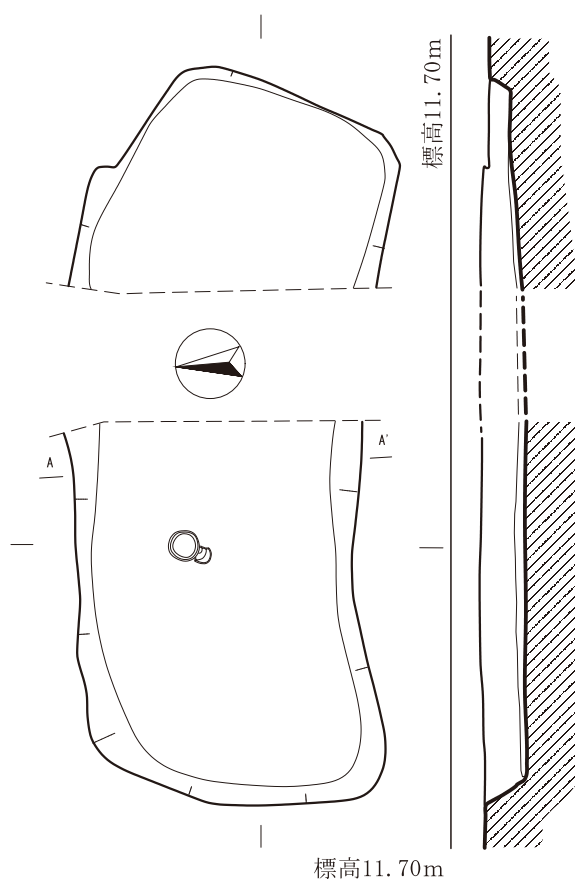


第17図 SK110・SK385・SK17・ST92実測図 (1/40)

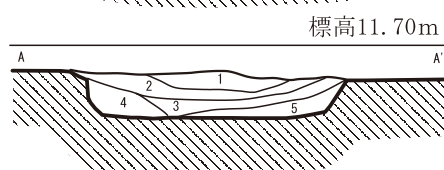


ST383

- 1: 灰色粘土 (木棺痕跡)
- 2: 黒褐色粘土 (燼灰)
- 3: 灰色粘土
- 4: 灰色粘土
- 5: 灰色粘土 (床下埋土)



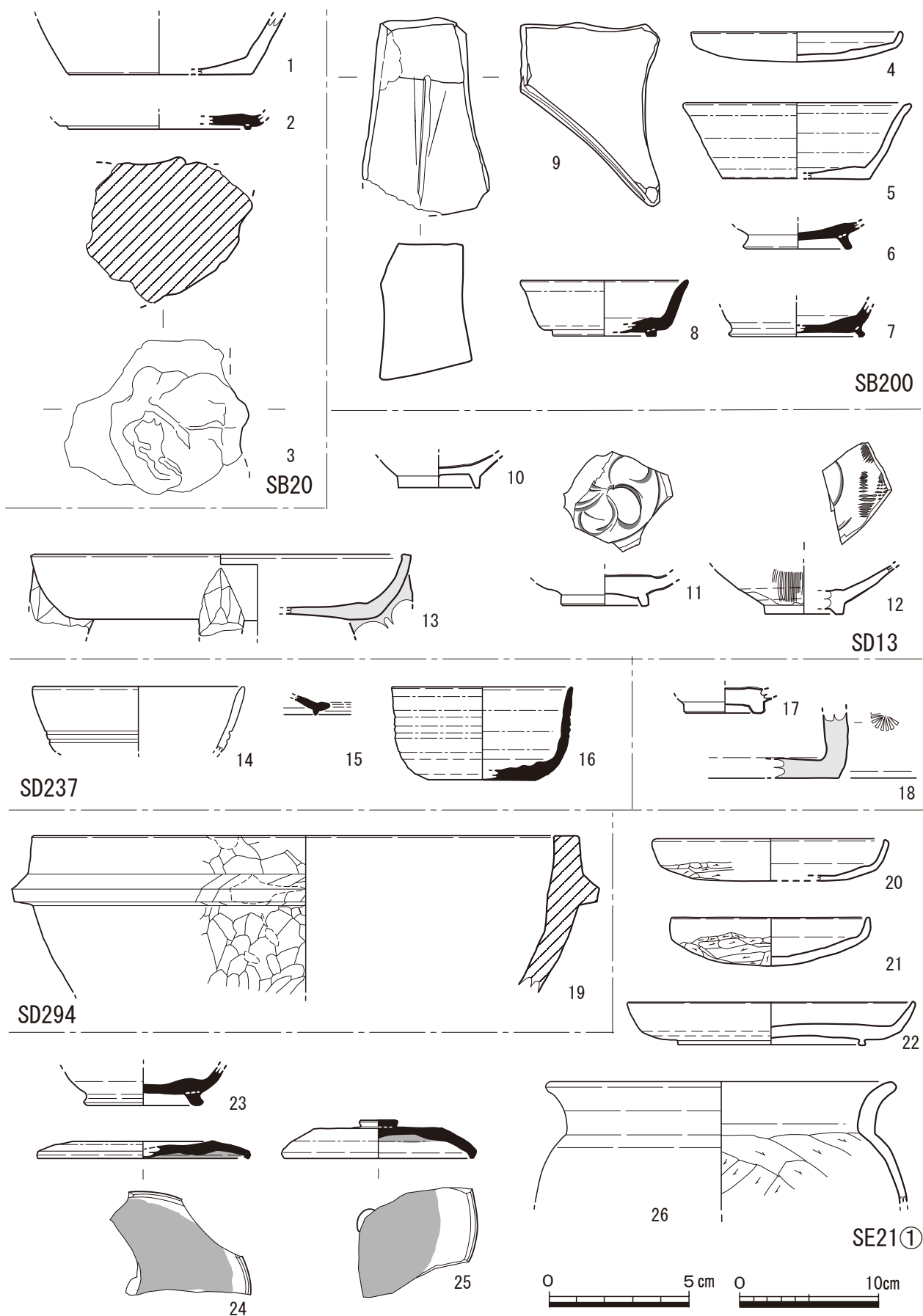
SK562



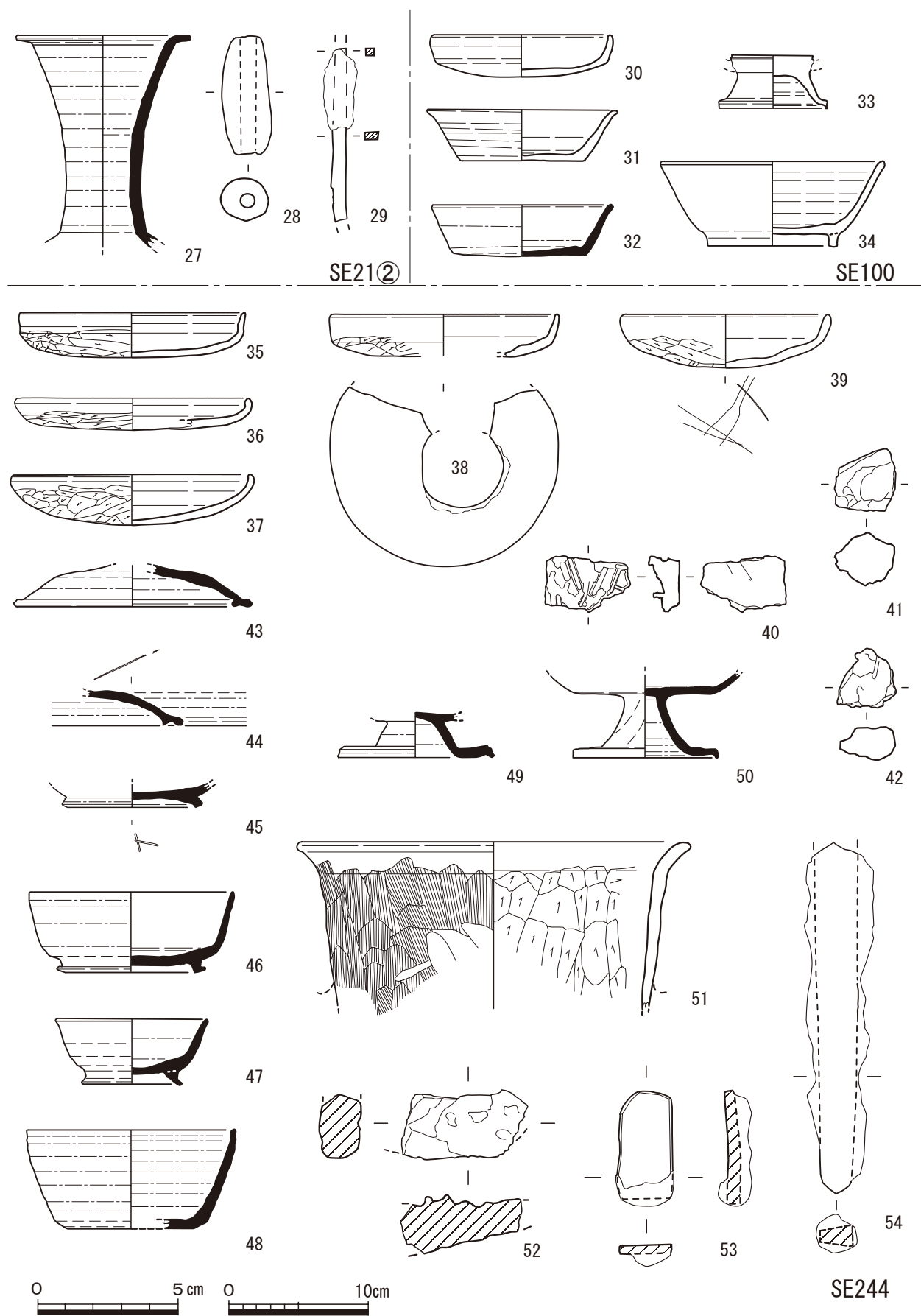
- 1: 暗褐色粘質土
- 2: 暗褐色粘質土
- 3: 灰色粘質土
- 4: 灰色粘質土
- 5: 灰色粘質土



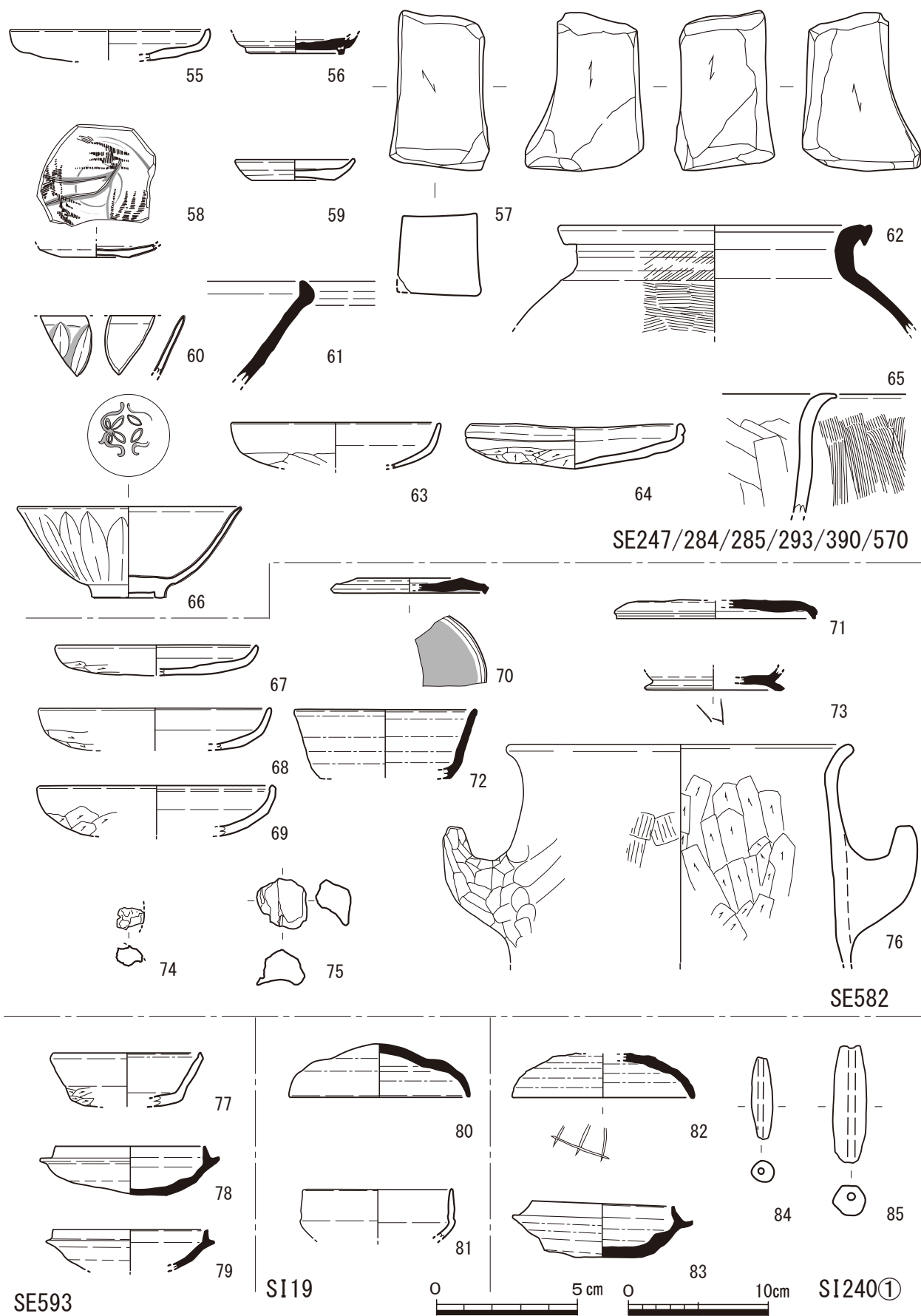
第18図 S T383・S K562実測図 (1/40)



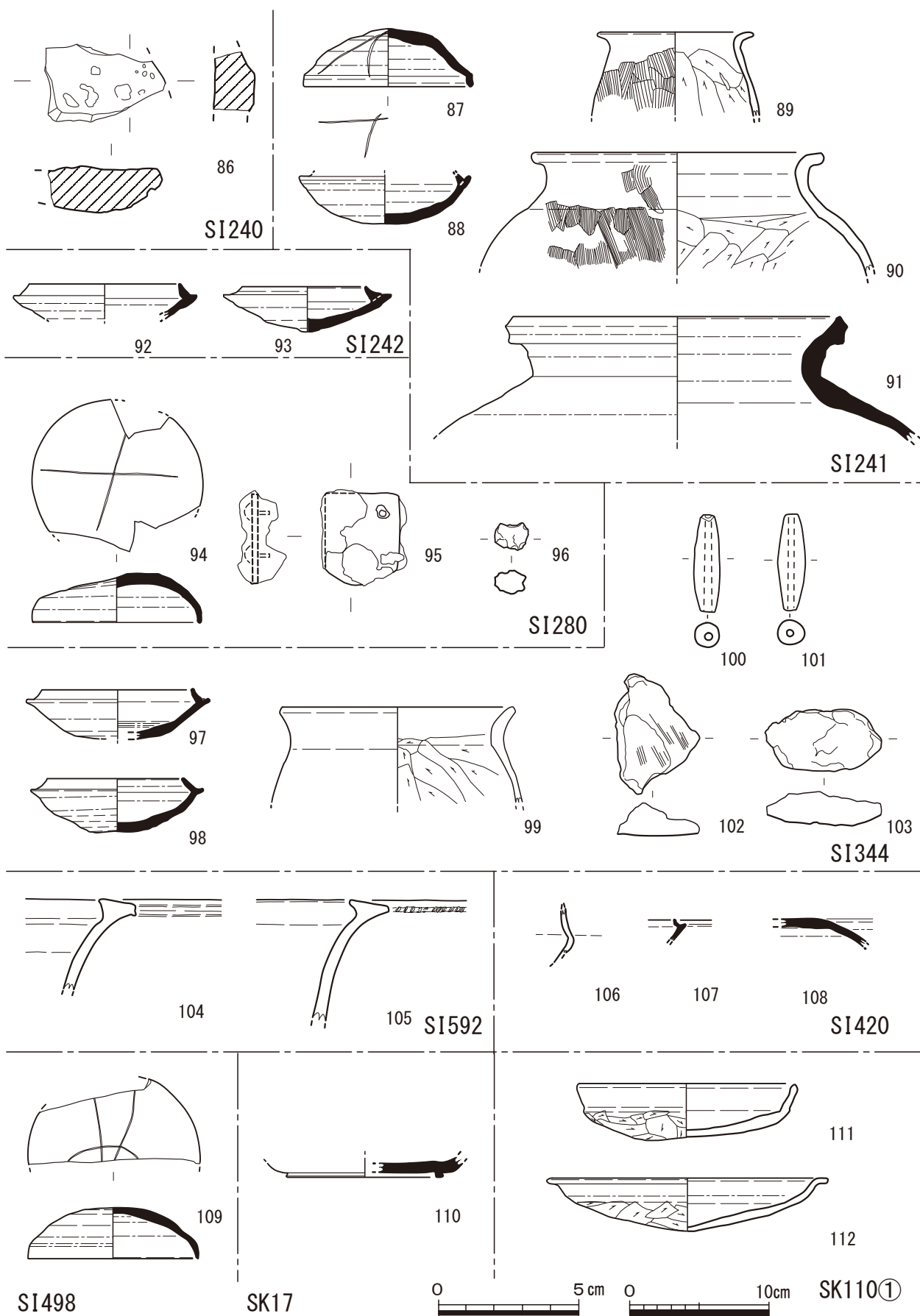
第19図 出土遺物実測図 (1/2・1/4)



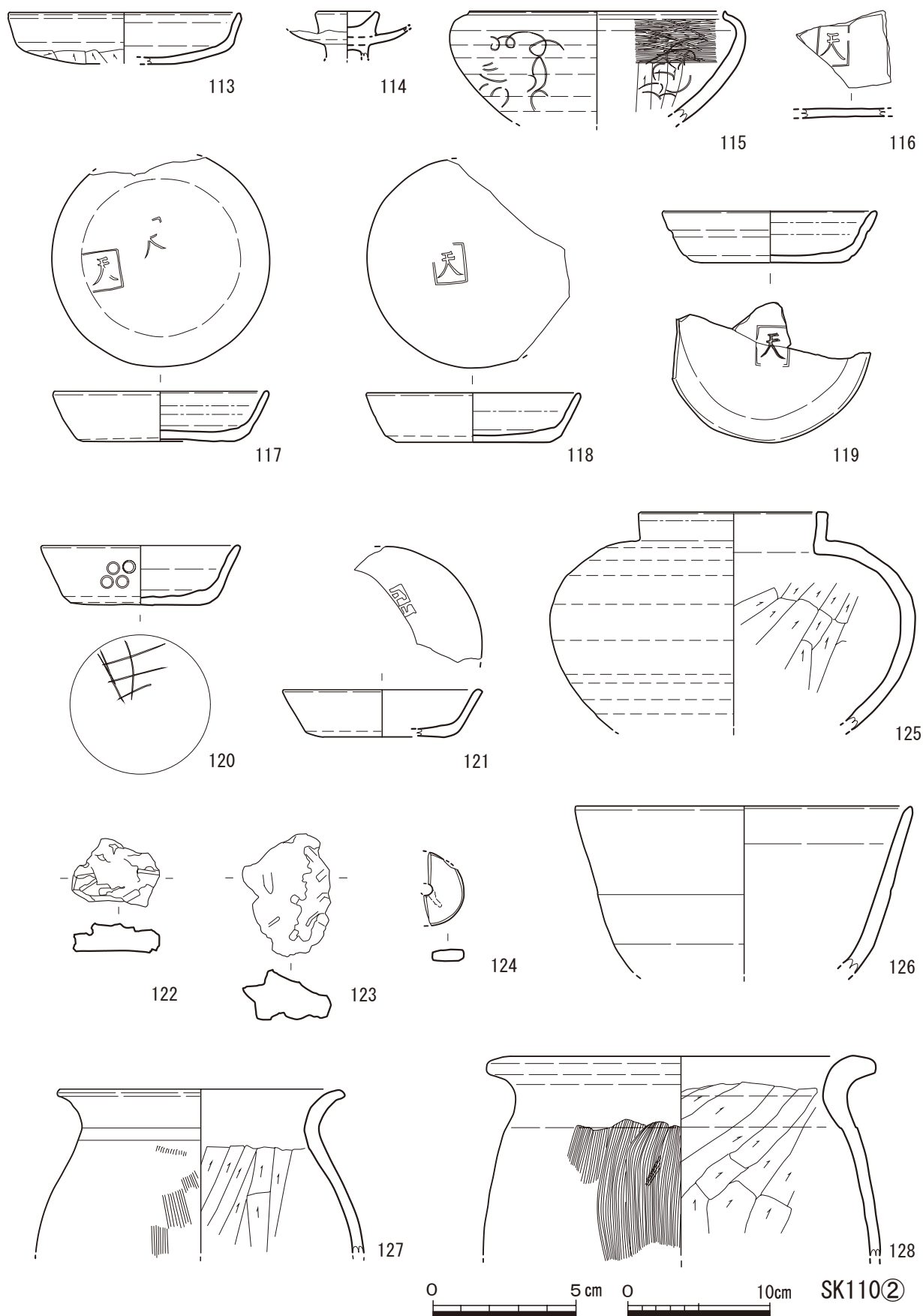
第20図 出土遺物実測図 (1/2・1/4)



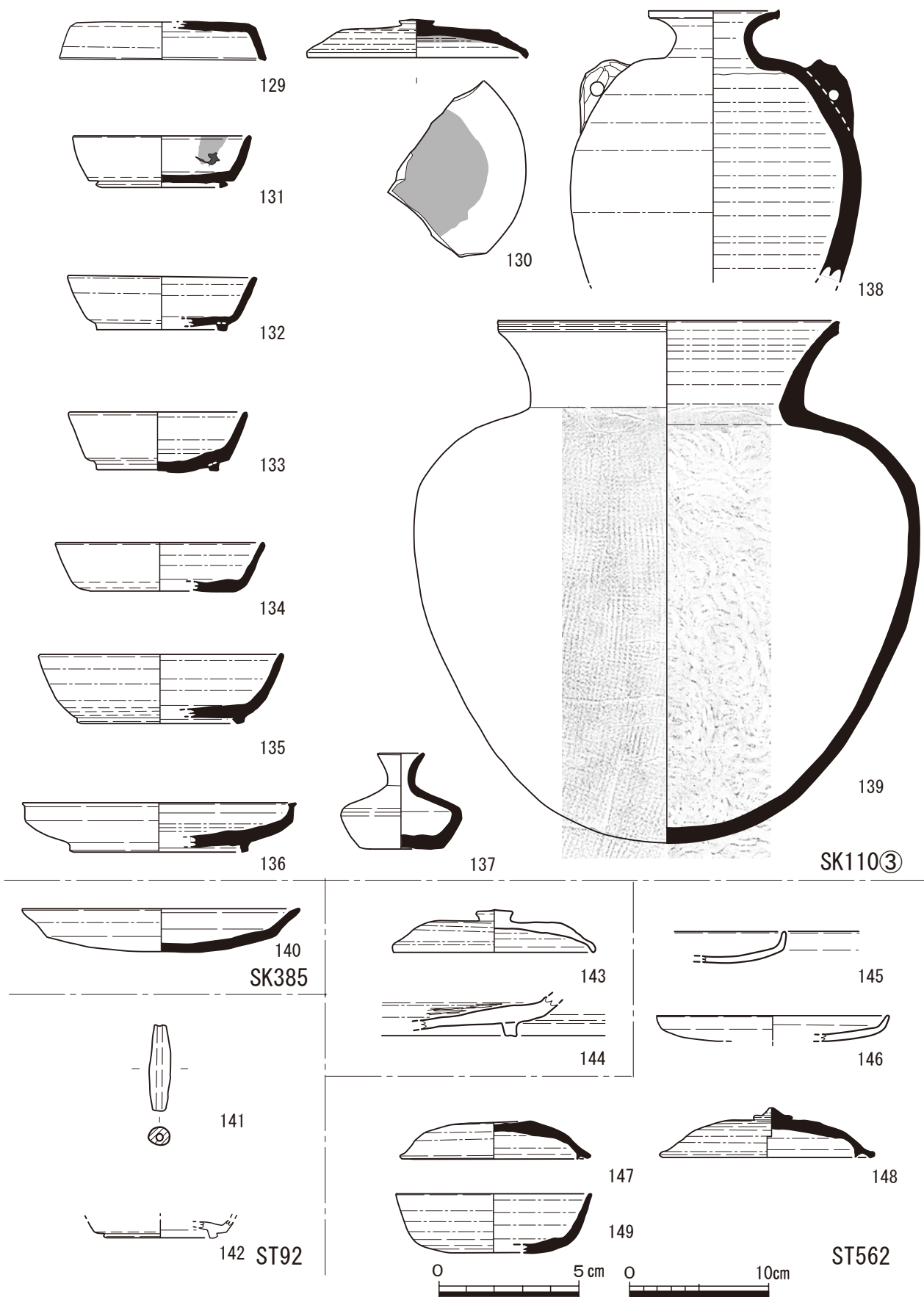
第21図 出土遺物実測図 (1/2・1/4)



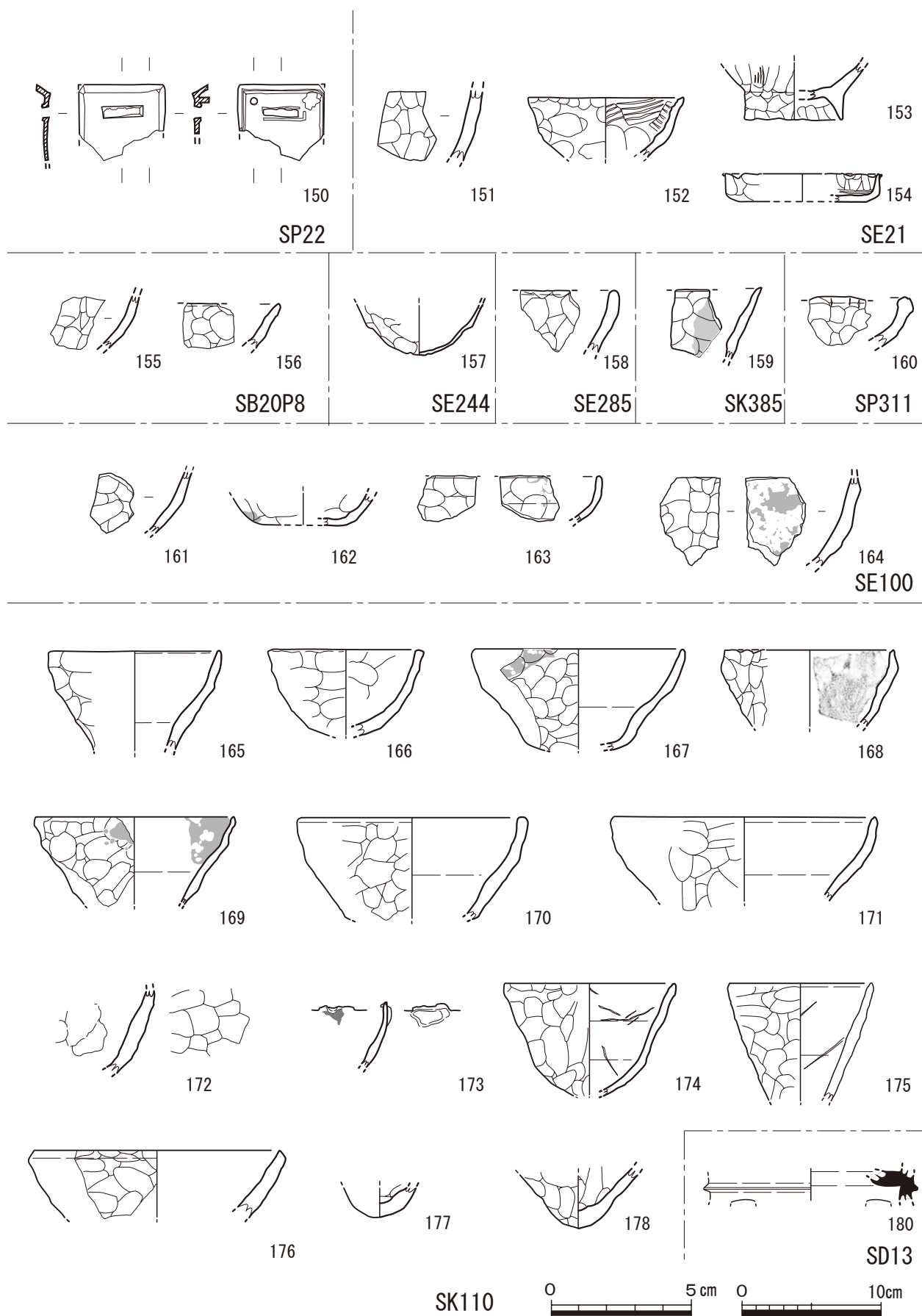
第22図 出土遺物実測図 (1/2・1/4)



第23図 出土遺物実測図 (1/2・1/4)



第24図 出土遺物実測図 (1/2・1/4)



第25図 出土遺物実測図 (1/2・1/4)

第1表 遺物観察表(1)

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整・文様		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第19図・図版11	SB20 -P 8	土師器	鉢	—	[13.0]	(4.0)	橙	橙	ヘラ切り(板目)・ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒(0.5mm赤色・白色粒子)		201315 —000029
2 第19図・図版11	SB20 -P 8	須恵器	埴	—	[13.0]	(1.1)	灰黄	灰黄	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	精良(1mm白色粒子)		201315 —000027
3 第19図・図版11	SB20 -P 8	鉄製品	鉄滓	(5.9)	(5.5)	(5.3)	にぶい褐	—	—	—	—	埴形重:178.9g	201315 —000030
4 第19図・図版11	SB200 -P 8	土師器	坏	[15.2]	—	3.2	橙	橙	手持ちヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	細砂粒(1mm白色粒子)		201315 —000116
5 第19図・図版11	SB200 -P 3	土師器	坏	16.4	10.6	5.5	浅黄橙	浅黄橙	ヘラ切り ヨコナデ ナデ	ヨコナデ・ナデ	細砂粒(1mm赤色粒子)		201315 —000045
6 第19図・図版11	SB200 -P 8	須恵器	埴	—	[7.8]	(1.9)	灰	灰	ヘラ切り ヘラケズリ	ナデ	精良(0.5mm白色粒子)		201315 —000117
7 第19図・図版11	SB200 -P 1	須恵器	埴	—	[9.6]	(2.5)	褐灰	褐灰	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	精良(3mm白色粒子)		201315 —000046
8 第19図・図版11	SB200 -P 3	須恵器	埴	12.0	7.2	4.0	灰黄褐	灰黄褐	ヘラ切り・ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	精良(0.5~2mm白色粒子)		201315 —000044
9 第19図・図版11	SB200 -P 8	石製品	砥石	7.0	4.7	4.9	にぶい黄	—	—	—	—	砂岩重:172g	201315 —000119
10 第19図・図版11	SD13	白磁	碗	—	[5.8]	(2.4)	灰白(釉)	灰白(素地)	ヘラケズリ	ナデ	精良(1mm黒色粒子)		201315 —000004
11 第19図・図版11	SD13	青磁	碗	—	6.0	(2.3)	オリーブ灰(釉)	灰白(素地)	ヘラケズリ	片彫蓮花文	精良(1mm黒色粒子)	龍泉窯系 I 類	201315 —000009
12 第19図・図版11	SD13	青磁	碗	—	[5.6]	(3.5)	オリーブ灰(釉)	灰白(素地)	ヘラケズリ・ナデ・櫛目文	花文・点描文	精良(0.5mm黒色粒子)	同案窯系 I 類	201315 —000007
13 第19図・図版11	SD13	瓦質土器	鉢	[27.2]	—	(5.8)	にぶい橙	橙	ヘラケズリ・ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	微砂粒(1mm白色・赤色粒子)		201315 —000012
14 第19図・図版11	SD237	土師器	坏	[15.2]	—	(4.7)	橙	橙	ヨコナデ 沈線	ヨコナデ	細砂粒(1mm白色粒子)		201315 —000160
15 第19図・図版11	SD237	須恵器	蓋	—	—	(1.4)	褐灰	褐灰	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	精良(0.5mm白色粒子)		201315 —000161
16 第19図・図版11	SD237	須恵器	坏	[12.8]	[7.6]	6.7	褐灰	褐灰	ヘラ切り・ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	精良(1~2mm白色粒子)		201315 —000162
17 第19図・図版11	SD294	青磁	碗	—	5.6	(1.0)	灰オリーブ(釉)	灰白(素地)	ヘラケズリ	ナデ	精良		201315 —000168
18 第19図・図版11	SD294	瓦質土器	火鉢	—	—	(4.7)	にぶい黄橙	灰白	印刻(菊)	ヨコナデ	砂粒(1mm黒色粒子、雲母)		201315 —000170
19 第19図・図版12	SD294	石製品	石鍋	[39.4]	—	(11.3)	灰	灰	ケズリ	ケズリ・ナデ・ミガキ	—	滑石	201315 —000169
20 第19図・図版12	SE21	土師器	坏	[17.0]	—	3.0	橙	橙	手持ちヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	細砂粒(0.5mm黒色粒子)		201315 —000031
21 第19図・図版12	SE21	土師器	坏	14.4	—	3.5	にぶい黄橙	にぶい橙	手持ちヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	細砂粒(0.5mm白色・1mm赤色粒子)		201315 —000032
22 第19図・図版12	SE21	土師器	脚付皿	20.8	13.5	3.1	橙	橙	ヘラ切り・ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	細砂粒(1mm赤色・黒色粒子)		201315 —000033
23 第19図・図版12	SE21	須恵器	埴	—	8.0	(2.7)	黄灰	黄灰	ヘラ切り・ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	精良(1mm白色粒子)		201315 —000039
24 第19図・図版12	SE21	須恵器	蓋	15.2	10.0	1.3	灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	精良(0.5mm白色粒子)	転用硯内面円滑	201315 —000037
25 第19図・図版12	SE21	須恵器	蓋	14.0	9.0	2.8	灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	精良(1mm白色粒子)	転用硯内面円滑	201315 —000038
26 第19図・図版12	SE21	土師器	甕	[25.2]	—	(8.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケ目→ ナデ	ケズリ・ナデ	砂粒(1~2mm白色粒子)		201315 —000035
27 第20図・図版12	SE21	須恵器	長頸壺	12.6	—	(15.2)	灰	灰	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	精良(1mm白色粒子)		201315 —000041
28 第20図・図版12	SE21	土製品	土錘	8.5	3.5	3.0	黄灰	—	ナデ・オサエ	—	微砂粒(1mm白色粒子、雲母)		201315 —000268
29 第20図・図版19	SE21	鉄器	鏃	(6.2)	0.5	0.3	黄褐	—	—	—	—	重:5.4g	201315 —000043
30 第20図・図版12	SE100	土師器	坏	[13.0]	[12.1]	(3.0)	橙	橙	手持ちヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	微砂粒(赤色粒子、金雲母)		201315 —000049

第2表 遺物観察表(2)

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整・文様		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
31 第20図・図版12	SE100	土師器	坏	13.6	8.9	3.7	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子)		201315 -000053
32 第20図・図版12	SE100	須恵器	坏	13.0	9.5	3.7	灰白	灰白	ヘラ切り(板目) ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒		201315 -000060
33 第20図・図版12	SE100	土師器	托	(5.7)	7.7	(3.8)	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ ナデ	ヘラケズリ ナデ	微砂粒(赤色粒子)		201315 -000057
34 第20図・図版12	SE100	土師器	埴	[16.0]	[9.3]	(6.1)	浅黄橙	浅黄橙	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子)		201315 -000054
35 第20図・図版12	SE244	土師器	坏	16.2	—	3.2	にぶい黄橙	にぶい橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(0.5~1mm白 色・黒色粒子)		201315 -000120
36 第20図・図版12	SE244	土師器	坏	17.0	—	2.3	橙	橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(1mm赤色粒 子)		201315 -000123
37 第20図・図版12	SE244	土師器	坏	[17.2]	—	3.5	橙	橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(1mm白色・ 赤色粒子)		201315 -000121
38 第20図・図版12	SE244	土師器	坏	16.4	—	3.0	浅黄橙	黄橙~ 浅黄橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(1mm黒色粒 子)	底部穿孔あり	201315 -000124
39 第20図・図版12	SE244	土師器	坏	[15.1]	—	3.9	橙	橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(1mm黒色粒 子)	内面にヘラ 記号あり	201315 -000122
40 第20図・図版12	SE244	土製品	壁土	(4.5)	(6.1)	(2.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—	—	細砂粒(雲母)	重:33.1g	201315 -000139
41 第20図・図版12	SE244	土製品	壁土	(4.5)	(4.3)	(3.8)	橙	—	—	—	微砂粒(金雲母)	重:46.7g	201315 -000137
42 第20図・図版12	SE244	土製品	壁土	(4.2)	(4.2)	(2.4)	にぶい橙	—	—	—	微砂粒(金雲母)	重:25.2g	201315 -000138
43 第20図・図版12	SE244	須恵器	蓋	[17.0]	—	(3.0)	灰	褐灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(0.5~1mm白色 粒子)	外面に胎土 目あり	201315 -000130
44 第20図・図版12	SE244	須恵器	蓋	—	—	(2.5)	灰白~ 黄灰	黄灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒	ヘラ記号あり	201315 -000129
45 第20図・図版13	SE244	須恵器	埴	—	[9.6]	1.7	黄灰	黄灰	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ナデ	精良(1~3mm白色 粒子)	底部外面 ヘラ記号あり	201315 -000127
46 第20図・図版13	SE244	須恵器	埴	[14.6]	[10.6]	(5.8)	灰	灰	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒		201315 -000128
47 第20図・図版13	SE244	須恵器	埴	[10.9]	[7.0]	(4.7)	灰	黄灰	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒		201315 -000126
48 第20図・図版13	SE244	須恵器	坏	[15.0]	[9.0]	7.1	灰	灰	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良(1~2mm白色 粒子)		201315 -000131
49 第20図・図版13	SE244	須恵器	高坏	—	[11.2]	3.2	灰	灰	回転ナデ ナデ	ナデ	精良(1~4mm白色 粒子)		201315 -000132
50 第20図・図版13	SE244	須恵器	高坏	—	[10.4]	(6.0)	灰	灰	ヘラケズリ・ヨ コナデ・シボリ	ヨコナデ ナデ	微砂粒		201315 -000133
51 第20図・図版13	SE244	土師器	甑	[28.4]	—	(11.9)	橙	にぶい黄褐	ハケ目・ナデ	ケズリ・ナデ	細砂粒(1mm白色粒 子)		201315 -000125
52 第20図・図版13	SE244	鉄製品	鉄滓	(4.6)	(2.5)	(1.5)	灰	—	—	—	—	埴形 重:26.8g	201315 -000135
53 第20図・図版19	SE244	鉄製品	小札?	4.1	2.1	0.8	青灰	—	—	—	—	重:9.9g	201315 -000136
54 第20図・図版19	SE244	鉄製品	刀子	12.6	2.5	1.4	灰黄褐	—	—	—	—	重:51.2g	201315 -000134
55 第21図・図版13	SE247	土師器	坏	[14.2]	—	(2.2)	灰白~ にぶい橙	にぶい黄橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(0.5mm白色 粒子、雲母)		201315 -000164
56 第21図・図版13	SE284	須恵器	埴	—	[7.0]	(1.3)	灰	灰	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒		201315 -000147
57 第21図・図版13	SE284	石製品	砥石	5.8	3.6	2.9	にぶい黄	—	—	—	—	砂岩 重:110.9g	201315 -000149
58 第21図・図版13	SE285	青磁	皿	—	[4.9]	(1.0)	灰オリーブ (釉)	黄灰(素地)	ヘラケズリ	篋文様 櫛点描文	精良	同案窯系 I 類	201315 -000150
59 第21図・図版13	SE293	土師器	小皿	8.5	5.8	1.5	灰黄褐	灰黄褐	糸切り(板目) ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒(赤色粒子)		201315 -000152
60 第21図・図版14	SE293	青磁	碗	—	—	(4.3)	灰オリーブ (釉)	灰白(素地)	鎚連弁文	ナデ	精良	龍泉窯系	201315 -000157

第3表 遺物観察表(3)

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整・文様		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
61 第21図・図版13	SE293	須恵器	鉢	—	—	(7.3)	黄灰	黄灰	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒		201315 —000159
62 第21図・図版13	SE293	須恵器	甕	[22.4]	—	(7.5)	灰	灰	ハケ目・平行 タタキ・ナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒	中世	201315 —000155
63 第21図・図版14	SE390	土師器	坏	[15.0]	—	(3.2)	橙～灰褐	橙～灰褐	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒(金雲母)		201315 —000171
64 第21図・図版14	SE390	土師器	坏	15.6	—	3.2	浅黄橙	にぶい黄橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(1mm白色粒 子)	外面に沈線 あり	201315 —000175
65 第21図・図版14	SE390	土師器	甕	—	—	(8.5)	橙	橙	ハケ目・ヨコ ナデ	ケズリ ヨコナデ	砂粒		201315 —000173
66 第21図・図版14	SE570	青磁	碗	[16.0]	[5.3]	(6.5)	灰オリーブ (釉)	灰白(素地)	鎬連弁文	見込み印刻	精良	龍泉窯系Ⅱ 類	201315 —000202
67 第21図・図版14	SE582	土師器	坏	14.4	—	2.1	橙	橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(0.5mm白色 粒子)		201315 —000210
68 第21図・図版14	SE582	土師器	坏	16.6	—	3.0	橙	明褐	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(1mm白色粒 子)		201315 —000209
69 第21図・図版14	SE582	土師器	坏	[17.0]	—	(3.6)	にぶい橙	橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(1mm赤色粒 子)		201315 —000211
70 第21図・図版14	SE582	須恵器	蓋	[11.2]	[7.4]	1.1	灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(0.5mm白色粒 子)	転用硯	201315 —000212
71 第21図・図版14	SE582	須恵器	蓋	—	[14.4]	1.3	灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(1mm白色粒 子)		201315 —000213
72 第21図・図版14	SE582	須恵器	坏	[13.0]	[9.4]	4.9	褐灰	褐灰	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	精良(1～4mm白色 粒子)		201315 —000216
73 第21図・図版14	SE582	須恵器	埴	—	[10.0]	(1.5)	褐灰	褐灰	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(0.5mm白色粒 子)	底部外面に ヘラ記号あり	201315 —000215
74 第21図・図版14	SE582	土製品	羽口	(1.6)	(1.9)	(1.5)	黒	—	—	—	—	重:3.5g	201315 —000221
75 第21図・図版14	SE582	土製品	壁土	(3.6)	(3.4)	(2.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—	—	細砂粒(雲母)	重:17g	201315 —000218
76 第21図・図版14	SE582	土師器	甕	[24.8]	—	(15.5)	橙	にぶい黄橙	ハケ目・ナデ ケズリ →ナデ	ケズリ ヨコナデ	砂粒(1～5mm白色 粒子、雲母)		201315 —000214
77 第21図・図版14	SE593	土師器	坏	[11.0]	—	(3.8)	浅黄橙	浅黄橙	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(1mm黒色、2 mm白色粒子)		201315 —000207
78 第21図・図版14	SE593	須恵器	坏	10.6	—	3.5	灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(1mm黒色・白 色粒子)		201315 —000208
79 第21図・図版14	SE593	須恵器	坏	[11.0]	—	(2.9)	にぶい橙	橙	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(1mm白色粒 子)		201315 —000206
80 第21図・図版15	SI19	須恵器	蓋	12.8	—	4.0	灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(1～2mm白色 粒子)	歪みが大きい	201315 —000025
81 第21図・図版15	SI19	土師器	坏	[10.8]	—	(3.5)	にぶい黄橙	橙	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒(雲母、0.5 mm黒色粒子)		201315 —000023
82 第21図・図版15	SI240	須恵器	坏蓋	[11.2]	—	3.2	暗灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(1mm白色粒 子)	ヘラ記号あり	201315 —000100
83 第21図・図版15	SI240	須恵器	坏身	10.0	—	4.0	黄灰	黄灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(2mm白色粒 子)	底面板目あり	201315 —000097
84 第21図・図版15	SI240	土製品	土鍾	5.8	1.7	1.7	浅黄	—	ナデ・オサエ	—	微砂粒(0.5mm白色 粒子)	重:12.0g	201315 —000105
85 第21図・図版15	SI240	土製品	土鍾	8.4	2.4	2.4	灰白～ 浅黄	—	ナデ・オサエ	—	微砂粒(1mm白色粒 子)	重:32.1g	201315 —000104
86 第22図・図版15	SI240	鉄製品	鉄滓	(4.4)	(2.8)	(1.6)	褐灰	褐灰	—	—	—	埴形 重:25.8g	201315 —000103
87 第22図・図版15	SI241	須恵器	坏蓋	12.2	—	4.2	灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(2mm白色粒子)	ヘラ記号あり	201315 —000109
88 第22図・図版15	SI241	須恵器	坏身	11.2	—	4.3	灰	灰	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	精良(0.5～1mm黒 色・白色粒子)		201315 —000163
89 第22図・図版15	SI241	土師器	甕	11.2	—	(6.0)	明褐	にぶい褐～ 灰褐	ハケ目・ナデ	ケズリ・ナデ	細砂粒(1～5mm白 色粒子)		201315 —000107
90 第22図・図版15	SI241	土師器	甕	[21.0]	—	(8.8)	橙	浅黄橙～ 灰白	ハケ目・ナデ	ケズリ・ナデ	砂粒(1～4mm白色 粒子、角閃石、雲母)		201315 —000108

第4表 遺物観察表(4)

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整・文様		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
91 第22図・図版16	SI241	須恵器	甕	[24.6]	—	(8.8)	黄灰	黄灰	タタキ 回転ナデ	タタキ(青海波) 回転ナデ	精良(0.5mm白色粒子)		201315 —000110
92 第22図・図版15	SI242	須恵器	坏身	[10.8]	—	(2.5)	灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	精良(1mm白色粒子)		201315 —000114
93 第22図・図版15	SI242	須恵器	坏身	12.0	—	3.3	灰白	灰白	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(2mm白色粒子)		201315 —000113
94 第22図・図版15	SI280	須恵器	坏蓋	[12.0]	—	(3.5)	灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒		201315 —000141
95 第22図・図版19	SI280	鉄製品	留金具	3.5	3.1	1.7	褐	—	—	—	—	重:16.5g	201315 —000143
96 第22図	SI280	土製品	羽口?	(2.0)	(2.4)	(1.6)	黒褐	—	—	—	—	重:3.0g	201315 —000144
97 第22図・図版15	SI344	須恵器	坏身	[10.7]	—	(3.6)	灰	褐灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒		201315 —000228
98 第22図・図版15	SI344	須恵器	坏身	9.8	—	3.9	灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(0.5mm白色粒子)		201315 —000227
99 第22図	SI344	土師器	甕	[17.0]	—	(6.9)	橙	にぶい黄褐	ハケ目・ナデ	ケズリ・ナデ	砂粒(1~2mm白色 粒子、角閃石、雲母)		201315 —000229
100 第22図・図版15	SI344	土製品	土錘	7.0	1.8	1.7	灰黄	—	ナデ・オサエ	—	微砂粒(金雲母)	重:22.6g	201315 —000230
101 第22図・図版15	SI344	土製品	土錘	6.9	2.0	1.8	にぶい黄橙	—	ナデ・オサエ	—	微砂粒(雲母、赤色 粒子)	重:22.7g	201315 —000231
102 第22図・図版16	SI344	土製品	壁土	(8.6)	(5.9)	(2.4)	にぶい橙	—	—	—	微砂粒(金雲母、赤 色粒子)	重:62.5g	201315 —000233
103 第22図・図版16	SI344	土製品	壁土	(8.3)	(4.5)	(2.4)	にぶい橙	—	—	—	微砂粒(金雲母、赤 色粒子)	重:55.7g	201315 —000232
104 第22図・図版16	SI391	弥生土器	広口壺	—	—	(6.5)	橙	橙	ヨコナデ ナデ	ヘラケズリ ヨコナデ	砂粒(金雲母)		201315 —000181
105 第22図・図版16	SI391	弥生土器	広口壺	—	—	(8.7)	橙	橙	キザミ・ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子、 金雲母)		201315 —000180
106 第22図・図版16	SI420	土師器	坏	—	—	(3.9)	橙	橙	ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒(0.5mm白色 粒子、雲母)		201315 —000183
107 第22図・図版16	SI420	須恵器	坏	—	—	(1.5)	褐灰	褐灰	ヨコナデ	ヨコナデ	精良(0.5~1mm白色 粒子)		201315 —000189
108 第22図	SI420	須恵器	蓋	—	—	(2.0)	暗灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(3mm白色粒子)		201315 —000186
109 第22図・図版15	SI498	須恵器	蓋	[12.2]	—	(3.7)	灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒	ヘラ記号あり	201315 —000190
110 第22図・図版16	SK17	須恵器	埴	—	[11.2]	(1.4)	灰	灰	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(1mm白色粒子)		201315 —000021
111 第22図・図版16	SK110	土師器	坏	15.8	—	4.1	にぶい橙	にぶい橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(1~2mm白 色粒子)		201315 —000243
112 第22図・図版16	SK110	土師器	坏	[20.2]	—	3.9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(1mm黒色粒 子、金雲母)		201315 —000077
113 第23図・図版16	SK110	土師器	坏	[16.4]	[15.4]	(3.6)	橙	浅黄橙~ 橙	手持ちヘラケ ズリ・カキ目	ヨコナデ ナデ	微砂粒	丹が残る	201315 —000076
114 第23図・図版16	SK110	土師器	托	[4.6]	—	(3.3)	にぶい橙	にぶい橙	ヘラケズリ ヨコナデ	接合ナデ ナデ	細砂粒(1mm赤色・ 黒色粒子)	丹が残る	201315 —000250
115 第23図・図版16	SK110	土師器	鉄鉢	—	—	(7.8)	橙	橙	ケズリ・ヨコナ デ・暗文	ケズリ・ヨコナ デ・暗文	微砂粒(赤色粒子)		201315 —000078
116 第23図・図版16	SK110	土師器	坏	—	—	(0.6)	橙	橙	ヘラ切り	ナデ	細砂粒(赤色粒子)	内面印刻 『天』	201315 —000064
117 第23図・図版16	SK110	土師器	坏	15.2	11.0	3.6	橙~にぶい 黄橙	橙	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒(赤色粒子)	内面印刻 『天』	201315 —000062
118 第23図・図版16	SK110	土師器	坏	[15.0]	12.3	3.5	浅黄橙	浅黄橙	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒(赤色粒子)	内面印刻 『天』	201315 —000063
119 第23図・図版16	SK110	土師器	坏	[15.0]	9.0	3.7	橙	橙	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒(1mm赤色・ 黒色粒子、雲母)	内面印刻 『天』	201315 —000242
120 第23図・図版16	SK110	土師器	坏	[14.0]	9.7	(4.2)	橙	橙	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒(赤色粒子)	ヘラ記号・ 印刻あり	201315 —000234

第5表 遺物観察表(5)

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整・文様		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
121 第23図・図版16	SK110	土師器	坏	[14.0]	[10.8]	(3.3)	橙	橙	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子)	内面印刻あり	201315 —000073
122 第23図・図版17	SK110	土製品	壁土	(6.2)	(4.8)	(2.0)	にぶい黄橙	—	—	—	微砂粒(金雲母)	重:40.5g	201315 —000079
123 第23図・図版17	SK110	土製品	壁土	(8.6)	(6.1)	(3.5)	橙	—	—	—	微砂粒(金雲母)	重:90.8g	201315 —000080
124 第23図・図版17	SK110	石製品	紡錘車	5.1	(2.8)	0.8	灰	—	—	—	—	重:18.3g	201315 —000095
125 第23図・図版17	SK110	土師器	壺	[11.8]	—	(15.3)	浅黄橙	浅黄橙	ヘラケズリ ナデ	ヘラケズリ ナデ	細砂粒(1mm白色・ 赤色粒子)		201315 —000237
126 第23図・図版17	SK110	土師器	鉢	[23.8]	—	(11.7)	橙	橙	ヘラケズリ ナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒		201315 —000235
127 第23図・図版17	SK110	土師器	甕	[20.2]	—	(11.5)	橙	橙	ハケ目 ヨコナデ	ケズリ・ヨコナ デ	砂粒(赤色粒子、金 雲母)		201315 —000236
128 第23図・図版17	SK110	土師器	甕	27.4	—	(14.0)	浅黄橙	橙	ハケ目・ナデ	ケズリ・ナデ	砂粒(1～3mm白色 粒子)		201315 —000247
129 第24図・図版17	SK110	須恵器	壺蓋	[14.6]	—	(2.7)	黄灰	灰白	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒		201315 —000238
130 第24図・図版17	SK110	須恵器	蓋	[15.6]	—	(2.8)	灰白	灰黄	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒	転用硯	201315 —000092
131 第24図・図版17	SK110	須恵器	埴	12.8	9.5	3.7	浅黄	浅黄	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒(1mm白色粒子)	灯明として 使用	201315 —000089
132 第24図・図版17	SK110	須恵器	埴	[13.6]	[9.4]	(3.9)	灰白～ 黄灰	灰白	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒		201315 —000241
133 第24図・図版17	SK110	須恵器	埴	[12.8]	[8.7]	(4.4)	灰白	灰白	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒		201315 —000240
134 第24図・図版17	SK110	須恵器	坏	[15.0]	[10.0]	(3.5)	灰白	灰白	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒		201315 —000239
135 第24図・図版17	SK110	須恵器	埴	[17.6]	[12.0]	(5.0)	灰白	灰黄	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒		201315 —000088
136 第24図・図版17	SK110	須恵器	皿	[19.6]	[12.8]	(3.5)	灰白～ 灰黄	灰白	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒		201315 —000090
137 第24図・図版17	SK110	須恵器	小壺	3.4	[6.0]	(6.9)	灰	灰	ヘラ切り・回 転ナデ・ナデ	回転ナデ	微砂粒		201315 —000093
138 第24図・図版17	SK110	須恵器	壺	[9.4]	—	(19.6)	褐灰	褐灰	回転ナデ ケズリ・ナデ	回転ナデ	精良(1mm白色粒子)	外面自然釉	201315 —000094
139 第24図・図版17	SK110	須恵器	大甕	48.8	—	75.0	にぶい橙	にぶい橙	正格子タタキ 回転ナデ	タタキ(青海波) 回転ナデ	細砂粒		201315 —000278
140 第24図・図版18	SK385	須恵器	皿	20.0	—	3.1	灰白～ 褐灰	灰白	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	精良(0.5mm白色粒子)		201315 —000248
141 第24図・図版18	SK92	土製品	土錘	6.3	1.6	1.6	灰白～ 褐灰	—	ナデ・オサエ	—	細砂粒(0.5mm黒色 粒子)	重:12.7g	201315 —000048
142 第24図・図版18	SK92	土師器	埴	—	[8.2]	(1.3)	橙	橙	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(0.5mm白色 粒子)		201315 —000047
143 第24図・図版18	ST383	土師器	蓋	14.3	—	3.1	橙	橙	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子)		201315 —000191
144 第24図・図版18	ST383	土師器	高台付皿	—	—	(2.8)	橙	橙	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ナデ→ミガキ	細砂粒(金雲母)		201315 —000192
145 第24図・図版18	SK562	土師器	坏	—	—	(2.3)	橙	にぶい橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子)		201315 —000198
146 第24図・図版18	SK562	土師器	坏	[16.6]	—	(1.8)	浅黄橙	浅黄橙	手持ちヘラケ ズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒(赤色粒子)		201315 —000197
147 第24図・図版18	SK562	須恵器	坏蓋	13.7	—	2.8	灰	灰	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	微砂粒		201315 —000199
148 第24図・図版18	SK562	須恵器	坏蓋	15.4	—	3.6	灰黄	灰白	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	砂粒		201315 —000200
149 第24図・図版18	SK562	須恵器	坏身	[14.0]	[8.8]	(4.2)	灰白	灰	ヘラ切り・ヘラ ケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	細砂粒		201315 —000201
150 第25図・図版18	SP22	銅製品	帯金具	(2.7)	3.1	0.5	暗灰黄	—	—	—	—	重:5.4g	201315 —000222

第6表 遺物観察表(6)

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整・文様		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
151 第25図・図版18	SE21	土製品	製塩土器	—	—	(5.0)	橙	にぶい橙	ナデ・オサエ	ナデ	砂粒(2mm白色粒子)	鉢形	201315 —000267
152 第25図・図版18	SE21	土製品	製塩土器	11.2	—	(4.3)	にぶい橙	にぶい橙	ナデ・オサエ	ハケ目・オサエ	砂粒(1～2mm白色・0.5mm黒色粒子・金雲母)	逆円錐形	201315 —000225
153 第25図・図版19	SE21	土製品	製塩土器	—	[7.0]	(4.1)	橙～ にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ・オサエ ハケ目→ナデ	ナデ	微砂粒(0.5mm白色・黒色粒子)	筒形台付	201315 —000265
154 第25図・図版19	SE21	土製品	製塩土器	[11.0]	[9.0]	2.0	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ・オサエ	ナデ	砂粒(雲母)	皿形	201315 —000266
155 第25図・図版18	SB20 -P 8	土製品	製塩土器	—	—	(3.7)	橙	橙	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	砂粒(角閃石・金雲母・0.5mm白色・黒色粒子)	鉢形 二次焼成痕	201315 —000275
156 第25図・図版18	SB20 -P 8	土製品	製塩土器	—	—	(3.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ・オサエ	ナデ	砂粒(2mm白色粒子)	鉢形	201315 —000276
157 第25図・図版18	SE244	土製品	製塩土器	—	—	(3.6)	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ・オサエ	ナデ	微砂粒(雲母・0.5mm黒色粒子)	鉢形 二次焼成痕	201315 —000274
158 第25図・図版18	SE285	土製品	製塩土器	—	—	(4.4)	橙	橙	ナデ・オサエ	ナデ	微砂粒(雲母・0.5mm黒色粒子)	鉢形 二次焼成痕	201315 —000273
159 第25図・図版18	SK385	土製品	製塩土器	—	—	(4.8)	灰白	にぶい橙	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	砂粒(1mm赤色・黒色粒子・雲母)	二次焼成痕	201315 —000226
160 第25図・図版18	SP311	土製品	製塩土器	—	—	(3.5)	橙	橙	ナデ・オサエ	ナデ	細砂粒(1mm赤色粒子)	鉢形 二次焼成痕	201315 —000277
161 第25図・図版18	SE100	土製品	製塩土器	—	—	(4.3)	にぶい黄橙	橙	ナデ・オサエ	ナデ	細砂粒(雲母・1mm白色粒子)	鉢形 二次焼成痕	201315 —000269
162 第25図・図版18	SK110	土製品	製塩土器	—	[7.4]	(2.3)	橙	にぶい黄橙	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	微砂粒(雲母・0.5mm白色・赤色粒子)	鉢形 二次焼成痕	201315 —000270
163 第25図・図版18	SK110	土製品	製塩土器	—	—	(3.3)	橙	橙	ナデ・オサエ	オサエ→ナデ	微砂粒(0.5mm白色粒子)	鉢形 二次焼成痕	201315 —000271
164 第25図・図版18	SK110	土製品	製塩土器	—	—	(6.4)	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ・オサエ	ナデ	細砂粒(雲母・0.5mm黒色粒子)	鉢形 二次焼成痕	201315 —000272
165 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	12.4	—	(7.1)	灰白～ にぶい橙	灰白～ にぶい橙	ナデ・オサエ	ナデ	細砂粒(角閃石・雲母・0.5mm白・赤・黒色粒子)	鉢形	201315 —000251
166 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	[11.2]	—	(6.2)	にぶい黄橙	灰白	ナデ・オサエ	オサエ→ナデ	細砂粒(0.5～1mm白色粒子)	鉢形	201315 —000252
167 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	[15.4]	—	(7.2)	浅黄橙	橙	ナデ・オサエ	オサエ→ナデ	細砂粒(1mm白色粒子)	鉢形	201315 —000254
168 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	[12.8]	—	(5.5)	橙	橙	ナデ・オサエ	オサエ・布目	細砂粒(0.5mm白色粒子)	鉢形	201315 —000255
169 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	[14.4]	—	(6.3)	橙	にぶい橙	ナデ・オサエ	オサエ→ナデ	微砂粒(0.5mm黒色粒子)	鉢形 二次焼成痕	201315 —000256
170 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	[16.6]	—	(7.3)	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ・オサエ	ナデ	微砂粒(角閃石・雲母・0.5mm白色粒子)	鉢形	201315 —000257
171 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	[19.2]	—	(6.0)	明黄褐	にぶい黄橙	ナデ・オサエ	ナデ	細砂粒(0.5mm白色粒子)	鉢形	201315 —000253
172 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	—	—	(6.0)	橙	橙	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	砂粒(角閃石・雲母・1mm白色粒子)	鉢形	201315 —000258
173 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	—	—	(5.2)	にぶい橙	にぶい橙	ナデ・オサエ	ナデ	砂粒(1mm白色粒子)	鉢形 二次焼成痕	201315 —000259
174 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	[12.4]	—	(8.1)	にぶい黄橙～ 橙	浅黄橙～ 橙	ナデ・オサエ	オサエ→ナデ	微砂粒(雲母・1mm赤色・0.5mm白色粒子)	鉢形 二次焼成痕	201315 —000264
175 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	[10.4]	—	(8.5)	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ・オサエ	ナデ	微砂粒(雲母・0.5mm白色粒子)	鉢形	201315 —000260
176 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	[17.6]	—	(4.8)	浅黄橙	浅黄橙	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	微砂粒(0.5mm黒色・白色粒子)	鉢形	201315 —000261
177 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	—	—	(2.1)	橙	橙	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	微砂粒(1mm赤色・白色粒子)	鉢形 二次焼成痕	201315 —000263
178 第25図・図版19	SK110	土製品	製塩土器	—	—	(3.3)	浅黄橙	にぶい橙	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	微砂粒(1mm白色粒子)	鉢形	201315 —000262
179 図版19	SK17	ウマ	白菌	—	—	(6.2)			ナデ	ナデ		部位不明	201315 —000223
180 第25図・図版11	SD13	須恵器	円面硯	[15.4]	—	(2.2)	灰色	灰色	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	微砂粒(1mm白色粒子)		201315 —000289

IV. 総括

1. 検出遺構の時期と性格について

各遺構の時期と性格について述べる。

まず、弥生時代の竪穴住居が1棟検出されている。中期初頭の遺物が出土しており、円形住居であることから考えても弥生中期初頭の所産の遺構であると言える。

次に井戸 S E 593を皮切りにして古墳時代後期の遺構が増加する。掘立柱建物と堅穴住居は、軸方向と切り合い関係から、3時期に分けられる。遺物の観察から、堅穴住居の時期幅は6世紀後半から7世紀初頭に収まり、この期間の中で二度の画期があると考えられる。

古い遺構から順に並べる。切り合いは縦線で表す。

古	S E593							
	S I 19		S I 242				S B610	S B533
	S I 241		S I 421	S I 498	S I 646	S I 647	S B620	S B630
新								
	S I 240		S I 420	S I 344	S B640			

S I 240やS I 344からは土錘が出土しており、生業を伴う通常の集落の様相がうかがえる。また、S I 240から碗形鉄滓が、S I 280からは轡の羽口片（96）と馬具の留金具（95）が出土しており、S I 19床面には焼土を伴う浅いすり鉢状のピットがあり、鍛冶炉の可能性もある。S I 19から製塩土器が出土しており、この集落は馬を飼い、馬具をはじめとした鉄製品の生産行っていた可能性があり、後に述べる馬との関係がこの時期からあったことがわかる。S I 344からは壁土が出土しており、付近に壁立ちの住居があった可能性を示しており、有力者の存在も示唆している。

次に7世紀第四四半期の須恵器蓋を副葬した土壌墓S T 562が造られる。長辺3.8mと、やや大ぶりの土壌墓であるが、類似した遺構が第1次、第2次調査でも検出されている。ただし第1次、第2次調査においてこの種の遺構の時期と性格は明示されていない。S T 562では完形の須恵器蓋を意図的に重ねて埋置しており、他に廃棄したような遺物もみられないことから、この種の遺構を墓と考える。

7世紀第4四半期から8世紀第1四半期にかけての遺構としては、S B200、S E244、S E21、S E390、S E582があげられる。この中では、S E244、S E21、S E390、S E582が古手の遺物を多く含み、S B200よりもやや先行すると考えられる。S B200の遺物は、8世紀第2四半期まであり、建て替え等の痕跡は確認できなかったが、ある程度の期間存続したと考えられる。S B20はS B200と軸を同じくしており、遺物の下限は8世紀第2四半期ごろとみられ、S B200存続中にS E21を埋め戻してS B200に付随する建物として建てられていると考えられる。このS B20と同じ

8世紀第2四半期の遺物が主体を占め、時期幅が短いS E 100とS K 110は、S B 200とS B 20と東西に並ぶように隣接しており、関連した遺構とみなすことができる。それぞれS B 200の使用者がかかわる廃棄行為によってその遺物が埋蔵されていると考えられる。これらの遺構からは、特異な遺物が多く出土しており、これらの遺構を残した使用者の性格を表している。S E 21、244、100の各井戸からは、鉄滓や鉄製品が多く、その組成は小札（53）、刀子（54）、鏃（29）、碗形鉄滓（52）である。S B 20からも大型の碗形鉄滓（3）が出土している。S B 200からは刃物痕がついた砥石（9）が出土している。古墳時代に続いて、この時期も遺跡内で鉄製品の加工が行われていたと思われる。また、S B 200の南2mにあるS P 22からは銅製の銚帯金具（150）が出土しており、規格は正八位相当を示す方一寸であり、郡の長官並みの階層の存在がうかがえる^{※1}。さらに、S K 110などから竹の痕がはっきりとわかる壁土が多く出土している。S B 200に塗られていたものである可能性がある。S K 110とS E 100からは土師器の仏具（33、114、115）とみられる物も出土している。製塩土器もこれらの遺構から多く出土している。東側20m地点にある8世紀前半の土坑S K 17からは馬の歯と製塩土器細片が出土している。また、井戸からは転用硯も出土している。さらには、S K 110からは雨乞いに使用した可能性が考えられる「天」刻印土器が出土している^{※2}。これらの遺物は、このエリアのこの時期の遺構に集中して入っており、このことからS B 200の使用者は、ある程度の文化力や政治力、生産力をもってこの一帯を統治した有力者であることがうかがえる。製塩土器と馬の歯については後で詳しく述べる。

8世紀第2四半期の遺構としては、木棺墓S T 383もある。S B 200から12mほど東にある遺構であり、上部を12世紀の溝S D 13に1mほど削平されつつも下部が残存しており、調査区全体が50cmほど削平されていることを考えれば、元の墓壇の深さは1.5mにもなる。S B 200に近く、軸方向も似通っていること、S B 200など一連の遺構の廃絶時期と時期が同じであることから、S B 200の使用者に関係する遺構である可能性がある。

中世の遺構は、S D 13、S D 294、S E 285、S E 293、S E 570があげられる。どれも12世紀の遺構と考えられる。S D 13はおおよそ40m四方の方形区画をなすことから、なんらかの居館が当地にあったものと考えられる。東側隣接地の「田村屋敷」については、濠にトレンチを開け、濠の埋土を調査したが、下層から幕末ごろの陶磁器が出土し、そのころまで溝浚えが行われていたことが分かった以外には、築造時期などを示す手がかりはなく、地域の伝承による「戦国時代ごろからある屋敷」以上の情報は得られなかった。そのため、S D 13との関係も不明である。

S E 570からは、馬の頭部以外の全身骨格が出土している。祭祀行為に伴うものと考えられるが、古代の様相を鑑みれば、当地が中世においても馬の生産や飼育に適した場所であった可能性がある。

※1 松村恵司2002「銚帯金具の位階表示機能」『銚帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所

※2 田中正日子氏のご教示による。

2. 古賀ノ上遺跡第3次調査出土方形板状鉄製品のC T撮影について

今回の調査で出土した鉄製品（53、95）について九州歴史資料館にてC T撮影による観察を行ったのでここに報告する。また、桃崎裕輔福岡大学教授にのご教示をいただくことができた。

実施日：平成26年11月25日（火）

場 所：九州歴史資料館

担当者：江頭俊介

対象遺物：①S I 280（6世紀末から7世紀初頭）竪穴住居出土鉄製品。

②S E 244（7世紀後半）井戸出土鉄製品。

分析方法：X線CT画像撮影による遺物形状の観察

観察の視点：資料①は、馬具の可能性があるので、鋳の有無を観察する。

資料②は、小札の可能性があるので、穿孔の有無を観察する。

結 果：資料①は3個の鋳が確認された。馬具の帯先に装着する金具と判明。

鋳頭には、質量の高い金属（鉄ではない金属）の箔をかぶせて、折り曲げている事が判明。

また、桃崎教授のご教示によれば、薄い鉄板で鋳の先を留めていることも判明。古墳時代後期に特有の形態であり、8世紀の唐風の物とは違う。

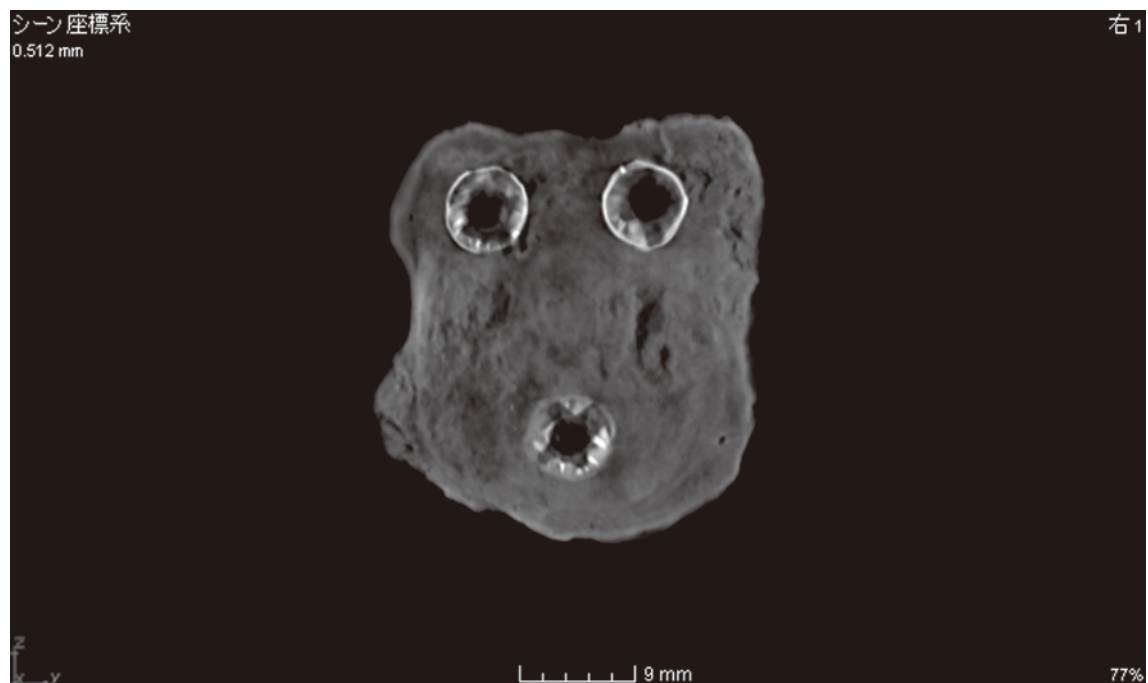
資料②は、短辺の一方は破損している可能性がある事が判明。穿孔は確認できない。こち

らも桃崎教授のご教示によると、小札の未成品の可能性はある。

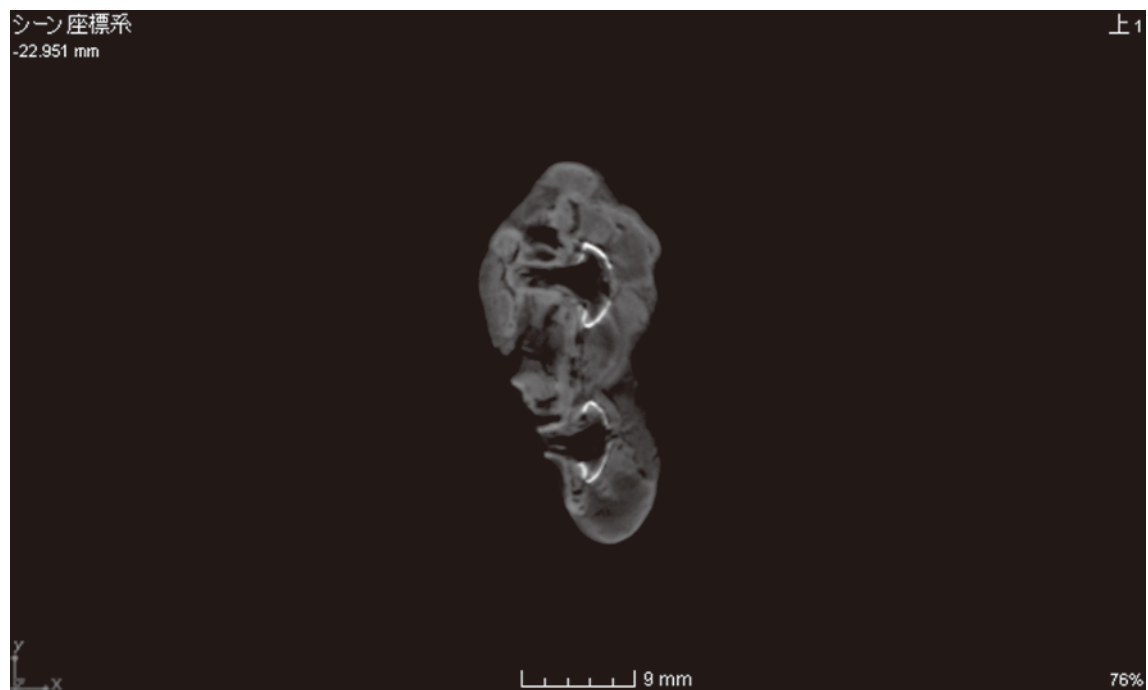
資料の法量：資料①縦32ミリ、横27ミリ、厚さ1ミリ

資料②縦36ミリ、横18ミリ、厚さ2ミリ

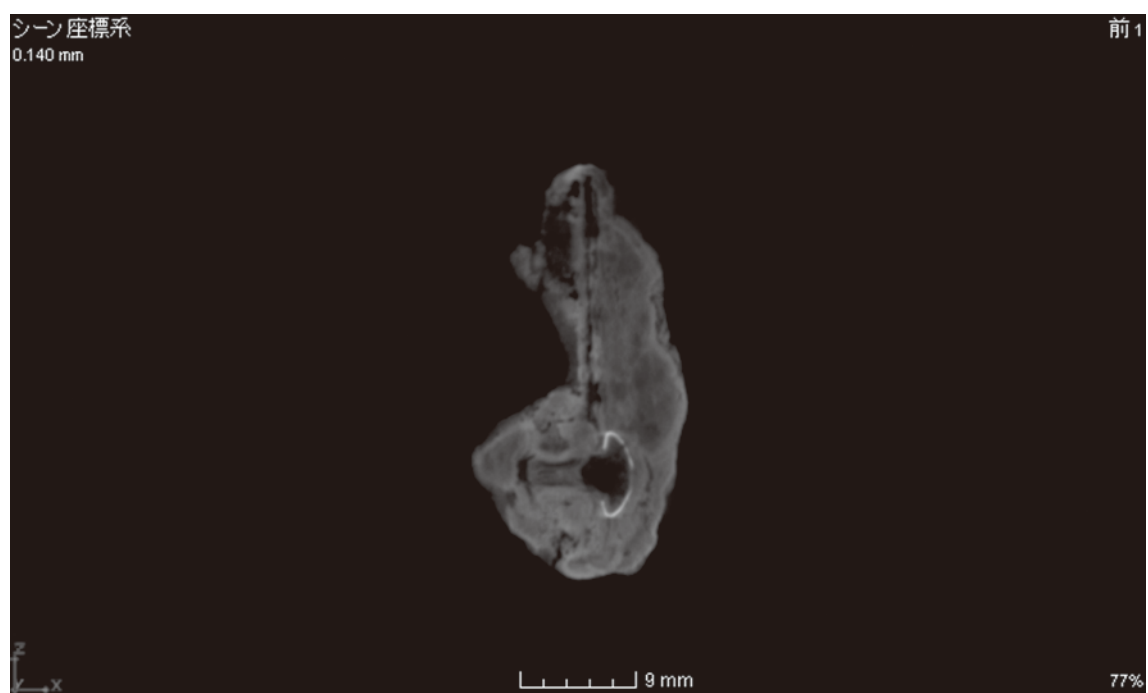
資料①CT写真



平面を輪切りにした画像



横断面（上から見る）

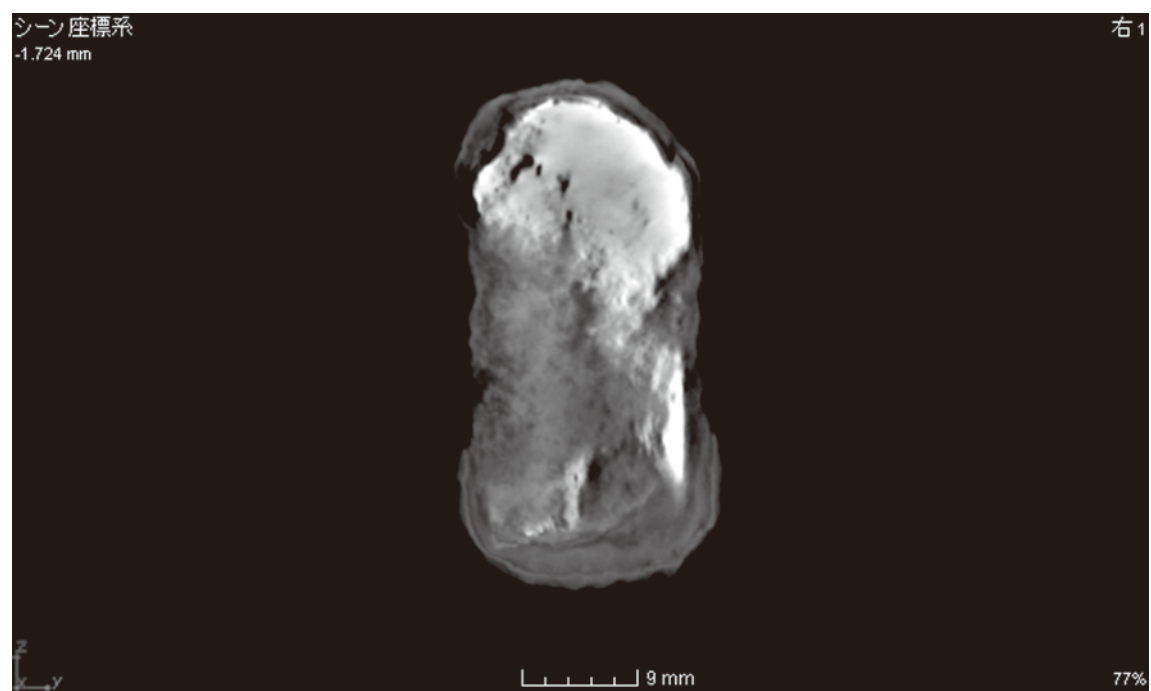


縦断面（中心を縦に切った画像）

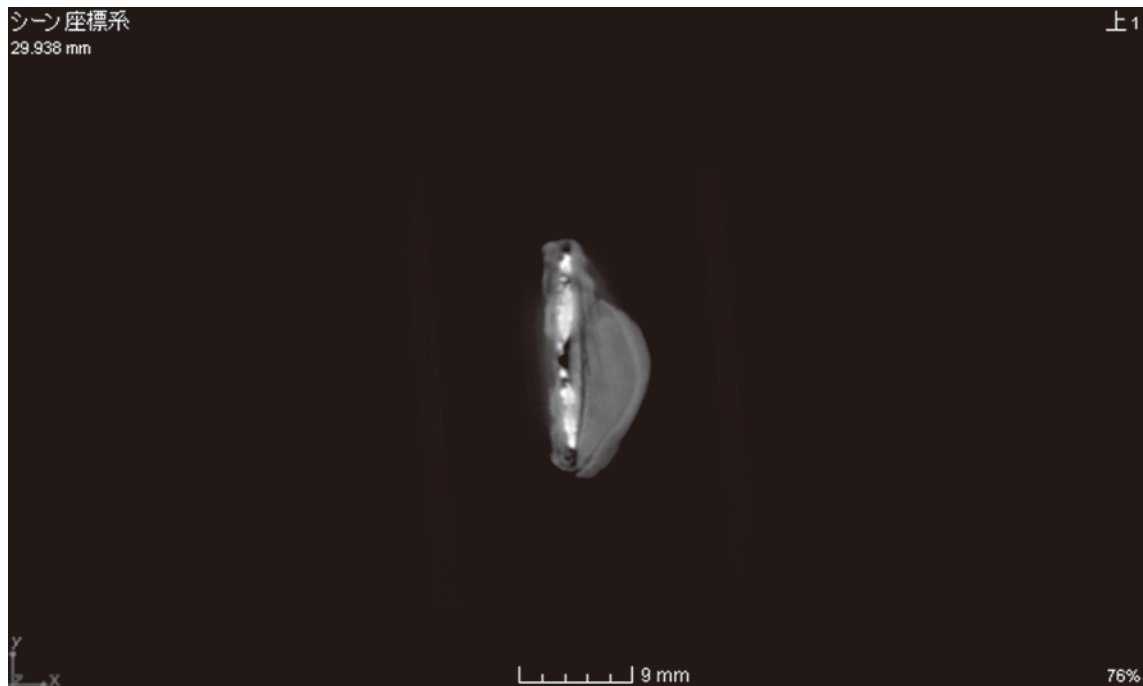
資料②C T写真



縦断面



平面



横断面

3. 古賀ノ上遺跡第2次調査Ⅱ-A区S I 009出土馬歯について

古賀ノ上遺跡の性格を考えるために、第2次調査の際に出土した馬の歯について、計測を行ったのでここで報告する。

1. 出土状況

4ピースの馬歯の出土あり。8世紀前半（第1四半期か）の竪穴住居Ⅱ-A区S I 009の床面付近から出土（北野町文報第14集）。

そのうち1ピースは、下顎の左右が重なっている。残りの3ピースは、それぞれ上顎であろう。各ピースの出土位置は不明。

2. 歯の状態

乾燥状態で保存中。

下顎の歯の残存率は100%近い。頭蓋骨、その他四肢骨などは残存していない。

3. 計測

下顎の右と上顎右が計測可。歯冠高は、それぞれ以下の通り。

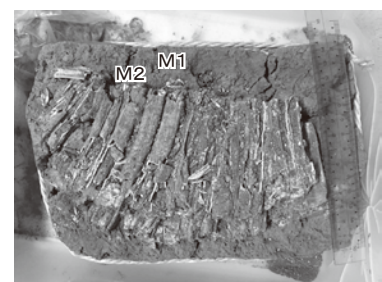
右下M1：67ミリ

右下M2：71ミリ

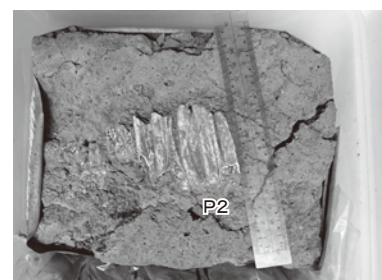
右上P2：48ミリ

4. 計測値から分かる年齢

4歳馬



右下顎



右上顎

歯が生えそろっており、歯冠高も相関表^{※1}の値に近い。よって4歳馬とみられる。

5. 小結

古代においては、2歳に調教を開始し、5歳になると、出荷するという^{※2}。4歳馬の出土は、調教中の馬が古賀ノ上遺跡に存在した確たる証拠である。このことは、古賀ノ上遺跡が、牧である可能性や、馬飼ひ集団の関与、御井駅の可能性、郡司層の存在など様々な可能性を提示している。

※1 西本豊弘・松井章編1999『考古学と動物学』同成社

4. 古賀ノ上遺跡第3次調査出土の製塩土器について

今回の調査では多くの製塩土器が出土した。馬の歯ともあわせ、当遺跡の性格を表す資料であるため、若干^{※2}の分析を行う。

出土個数：96片

器形：①鉢型

②筒型台付

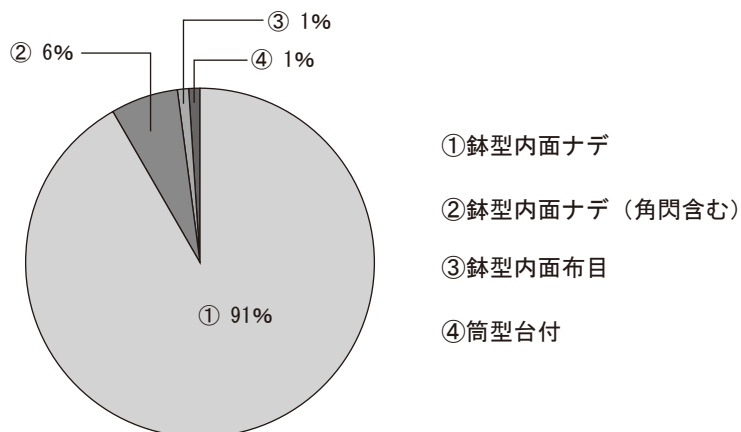
調整：①は内面ナデのタイプと内面布目のタイプあり

②はナデ、ハケメ、ケズリなど

胎土：①には角閃石を含まない個体と、含む個体あり。

割合：以下のグラフ参照

種類	出土点数
鉢型内面ナデ	88
鉢型内面ナデ（角閃石含む）	6
鉢型内面布目	1
筒型台付	1



※2 『厩牧令』によれば、2歳馬になると印を押して帳簿に記載し、4歳で交尾させ、5歳になると課を責めよとある。また、細馬（上馬）には塩を一日あたり36g与えよと規定されている。

製塩土器の形態と時期

※1
羽鳥（2013）によると、鉢型は容量が小さく300 g程度（0.5升）である。時期は、7世紀後半～8世紀前半に多いという。内面布目は、鉢型から円筒形に変化し、8世紀中頃以降に盛行する。古賀ノ上遺跡では、第3次調査区で布目が1点、内面ナデ鉢型が70点程度、第1次、第2次調査で布目が計6点出土している。第1次、第2次調査では内面ナデはピックアップしていないため点数は不明である。第3次調査で出土した鉢型の製塩土器が出土した遺構は、1点が6世紀後半、他は7世紀第四四半期から8世紀第2四半期までに収まり、6世紀後半に使用を開始し、およそ7世紀第4四半期から8世紀第2四半期にかけて活発に使用されたものとみられる。

筑後国府では、集計していないが、東限大溝付近で内面布目の製塩土器が多く出土する。内面ナデ鉢型も出土する。東限大溝付近は、7世紀後半は工房において使用され、9世紀前半には国厨があった可能性がある。塩はその間使用されたものであり、馬用ではなく人用であろう。

※1・2
福岡県内の製塩土器について概観してみると、

福岡市域：甕型（玄界灘式）、筒型（北九州に多い器形）が主流

大宰府：甕型、筒型、鉢型など九州のすべての器形あり。筒型布目少しあり。鉢型内面ナデが多い。

筑後国府：鉢型内面ナデが多い。鉢型布目も少しあり。甕型がわずかにある。筒型布目も少しあり。器形別に傾向を概観すると、鉢型は筑後国府跡、田川市、嘉麻市、太宰府市、北九州市に見られ、他の地域では宮崎県に見られる（宮崎県は布目）。田川市、嘉麻市では、北九州市と福岡市を中心に分布する筒型布目と鉢型が共伴する。筒型台付は香川、徳島、山口、広島など瀬戸内地方にある。また、北九州市に若干ある。鉢型内面ナデは、福岡県域に特有である。北九州市には少しある。海の中道遺跡には、宇土半島系に似た支脚付のものもある。玄海式甕が主流。筒型丸底も多い。古賀ノ上遺跡第3次調査出土の製塩土器の傾向を見ると、筑後国府跡に近い傾向を示す。また、大宰府とも部分的に共通する。筑後国府跡と大宰府よりも、古賀ノ上遺跡第3次調査出土の製塩土器の方が、器種が少ないのが特徴である。鉢型内面ナデが大部分を占め、供給源が限られているものと考えられる。胎土から見ると、角閃石を含む個体については、阿蘇4火山灰土壌が分布する地域が供給源として考えられる。宇土半島系の器形ではないため、肥後までは下らず、南筑後地方の可能性もある。筑豊地方にも鉢型内面ナデがあるが、筑後から供給されたものか、逆に豊前から入っているのか不明である。

以上のように見ると、古賀ノ上遺跡の製塩土器は、大宰府、筑後国府跡、豊前、筑豊との関係が見出され、なおかつ他地域に比べ供給源がある程度限定されている様相が見受けられる。

※1 羽鳥幸一 2013「瀬戸内の製塩と流通について」『塩の生産と官衛の集落』奈良文化財研究所

※2 埋蔵文化財研究会編『埋蔵文化財研究会海の生産用具』精文舎

5. 塩の用途と古賀ノ上遺跡の性格について

古賀ノ上遺跡で消費された塩の用途は、郡家、軍団、牧、駅などが想定できる。第2次調査Ⅱ-A区S I 009堅穴住居出土の8世紀前半の馬の歯が4歳馬であることは、調教中で出荷前の馬の存在と、調教施設の存在を示しており、牧の可能性の高さを窺わせる。また、「兵」と書かれた墨書土器

が第2次調査で8世紀第2四半期の井戸から出土していることは、当遺跡が軍団である可能性も感じさせるが、むしろ軍団に供給する予定の馬、もしくはそれを飼育する担当の人間を指す文字と解釈するほうが、4歳馬の出土との整合性が確保でき、現段階の結論としては、牧の可能性のほうが高いと思われる。7世紀後半から8世紀初頭の駅制の開始も視野に入れる必要があるが、官道に接しておらず、その可能性は高いとは言えない。^{※1} つぎに郡司層の私馬の可能性について考える。律令によると、郡司層が史生に遭ったときは下馬するという制があり、郡司層が馬を所有していたことは窺える。また、私馬の調査が毎年実施されているという記録もある。5世紀後半から6世紀代においては大刀洗町の本郷野開遺跡や、小郡市の三沢古墳群などで埋葬馬が確認されている。また、筑紫平野北部には馬市や馬田、馬屋、平方といった馬に関する地名も多い。5世紀後半から6世紀は『日本書紀』に見るように、筑紫の馬飼臣や筑紫馬が朝鮮半島に渡っていることから、古墳時代から筑紫平野北部で馬匹生産が行われていたと考えられ、豪族（のちの郡司層）の私馬というよりも、豪族が公的な馬匹生産や管理に携わっていたと見る方が自然であると思われる。

正史においては『続日本紀』文武4年(700)に、「初めて国牧を設置し、牛馬を放牧した」とある。筑後国以南に諸国牧が置かれた記録はないが、7世紀後半には多禰嶋に倭馬飼部造連などが派遣されており、多禰嶋に牧を設置するための視察と考えられる。そして『天平十年筑後国正税帳』によると、多禰嶋の人が牛馬皮を大宰府に届けており、この時期には多禰嶋に牧があったことは確実である。古賀ノ上遺跡が牧であるとした場合、多禰嶋などから移送された馬を管理する近都牧と考えるのが妥当であろう。天平10年(738)に牛馬皮を官に納めるために大宰府へ来た多禰嶋人28人には、25日分の食糧が支給されている。筑後国府から多禰嶋に至るまで途中で食料を補給する必要がある十分な量を支給しており、筑後国府が有明海から南島への航路の食料を支給することが通例となっていた(久文報59集)。多禰嶋に置かれた牧からは、牛馬の皮だけでなく、当然牛馬自体も届けられたであろう。古代の牧は、『厩牧令』によれば毎年60匹の仔馬を産出しなければならず、相当な数の馬が毎年、大宰府に納入されていたことだろう。それらの馬を大宰府に届けるならば、南島路の終着点である筑後国府を經由し、大宰府までの間に位置するこの古賀ノ上遺跡は、多禰嶋等で産出された馬を集積する近都牧であった可能性が十分に考えられる。牧は自然地形によって限られた範囲に設定するのが常であり、筑後川北岸の平野部の各地にその可能性があり、当遺跡近辺では、陣屋川と小石原川で限られた本郷～大城一帯をその範囲に想定することができる。

当遺跡では、第2次Ⅱ-B区に5世紀後半の少数の竪穴住居が現れた後、6世紀後半から7世紀に竪穴住居と掘立柱建物群が遺跡全体に展開する。8世紀前半には第3次S B 200や第2次Ⅰ-A区S B 001などの大型掘立柱建物群が出現し、8世紀第2四半期から第3四半期には仏堂とみられる^{※2}Ⅱ-B区の口の字型配置を呈する大型掘立柱建物群が建造される。その後廃棄土坑などに9世紀第2四半期までの遺物が包含されるのを最後に機能を終え、再び12世紀以降に活発な活動の痕跡が残される。馬匹生産に関連する遺物が出土している遺構は、7世紀後半から8世紀前半までに限られ、土師器の仏具や、仏堂とされる建物は、8世紀から9世紀前半に限られる。馬匹生産技術や仏

教施設を有する豪族に率いられた有力な集落が、8世紀前半に近都牧としての機能を担い、9世紀前半には牧の機能を大幅に低下させつつ、9世紀中ごろには廃絶されたと考えられる。9世紀前半は、奇しくも、国レベルの行政区であった多嶺嶋が大隅国に編入されて消滅する時期（824年）と重なる。公馬の輸送や供給の体制がすでに機能していなかった可能性や、朝廷による南島経営からの撤退が原因として考えられ、当遺跡が廃絶されたことと無関係ではないように思われる。

※1 あくまで現段階の可能性であり、今後官道や港津が検出される可能性はある。

※2 小澤太郎2012「西海道における四面廂建物の様相」『第15回古代官衛・集落研究会報告 四面廂建物を考える』奈良文化財研究所



※黄色線は推定官道（奈良時代）、緑線は北野天満宮参道（平安時代）、青線は河川を表す。（筑後川は天満宮に隣接していたという伝承に基づく）

第26図 古賀ノ上遺跡牧想定範囲図

図 版



1 調査区遠景（南西から）



2 調査区遠景（北東から）

図版 2



1 調査区近景（南から）



2 調査区近景（南から）



1 田村屋敷北辺（西から）



2 田村屋敷北辺土層観察箇所（北西から）



3 田村屋敷西辺（北から）



4 田村屋敷土塁トレンチ完掘状況（北西から）



5 S I 592完掘状況（南東から）



6 S B 610完掘状況（南東から）



7 S B 620完掘状況（南東から）



8 S B 630完掘状況（南東から）

図版 4



1 S B 640完掘状況（北西から）



2 S I 19完掘状況（南東から）



3 S I 19鍛冶炉検出状況（南西から）



4 S I 19鍛冶炉土層断面（南から）



5 S I 240床面検出状況（南から）



6 S I 240カマド検出状況（南から）



7 S I 242床面検出状況（南東から）



8 S I 242完掘状況（南東から）



1 S I 280床面検出状況（南東から）



2 S I 344床面検出状況（西から）



3 S I 344カマド検出状況（北西から）



4 S I 420・S I 421完掘状況（南から）



5 S I 498床面検出状況（南東から）



6 S I 498カマド遺物出土状況（南東から）



7 S I 498完掘状況（東から）



8 S B 20完掘状況（南から）

図版 6



1 S B 200完掘状況（北西から）



2 S B 200完掘状況（南東から）



3 S B 200 P 1 土層断面（西から）



4 S D 18完掘状況（南東から）



5 S D 237土層断面（北西から）



6 S E 21完掘状況（北から）



7 S E 21鉄鍬出土状況（北西から）



8 S E 100土層断面（南から）



1 S E100完掘状況（南西から）



2 S E244完掘状況（南東から）



3 S E390 S E582完掘状況（南東から）



4 S E390 S E582完掘状況（北東から）



5 S K17完掘状況（北から）



6 S K17完掘状況（南東から）



7 S K110遺物出土状況（南東から）



8 S K110遺物出土状況（西から）

図版 8



1 SK110完掘状況（南西から）



2 ST383遺物出土状況（北東から）



3 ST383遺物出土状況（北西から）



4 ST383完掘状況（西から）



5 ST562遺物出土状況（西から）



6 ST562遺物出土状況（西から）



7 ST562完掘状況（西から）



8 SP22銅製銚帯金具出土状況（西から）



1 S D13完掘状況（西から）



2 S D13土層断面（北から）



3 S E293土層断面（北から）



4 S E293調査風景（北から）



5 S E570馬骨出土状況（北東から）

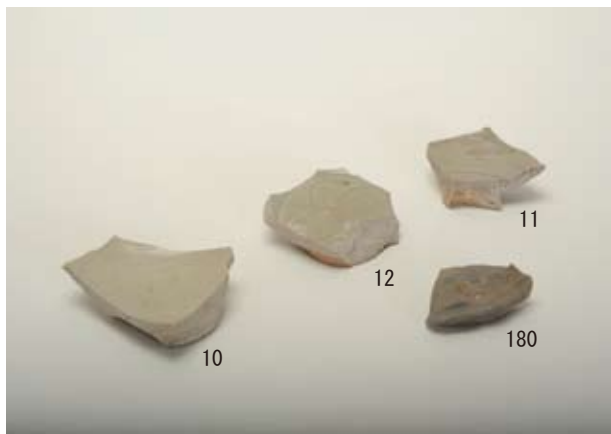
図版10



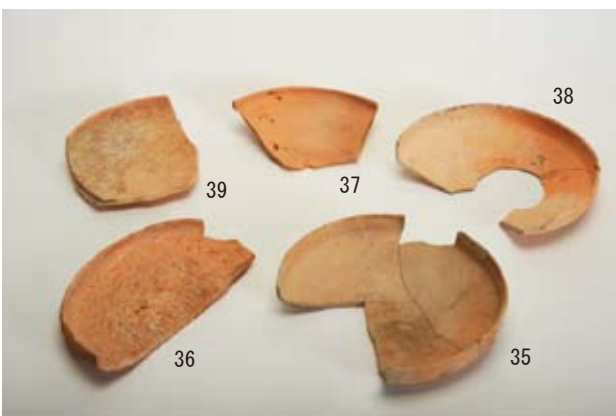
1 S E 570馬骨出土状況（南東から）



2 S E 570馬骨出土状況（北西から）

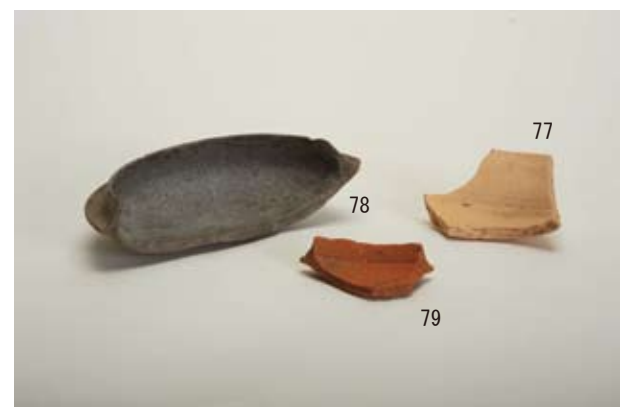


图版12



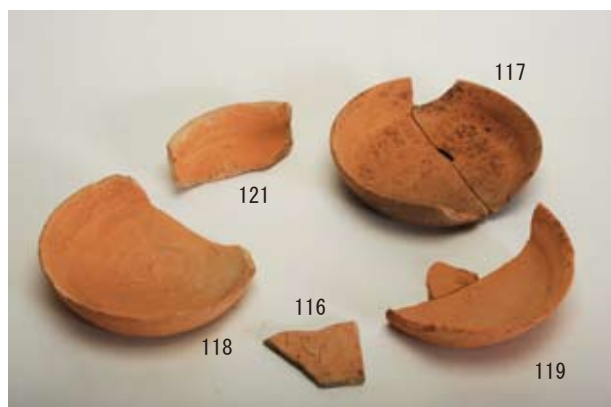


图版14





図版16





图版18





報 告 書 抄 録

ふりがな	こがのうえいせき だい3じちょうさ							
書 名	古賀ノ上遺跡 第3次調査							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第351集							
編著者名	江頭 俊介							
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課							
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel 0942-30-9225 FAX 0942-30-9715 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	平成27（2015）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
こがのうえいせき 古賀ノ上遺跡 だい3じちょうさ 第3次調査	くるめしきたのまち 久留米市北野町 なかがわあざしょうのしろ 中川字正後900-1	40203	—	33° 18′ 46″	130° 32′ 54″	20130827 ～ 20140120	2,400㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
古賀ノ上遺跡 第3次調査	集落	弥生 古墳 古代 中世	掘立柱建物 7棟 堅穴住居 12軒 溝 10条 井戸 11基 土坑 5基 土壇墓 3基		弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、銅製品、馬骨		奈良時代の大型掘立柱建物を検出した。同時代の遺構からは腰帯具などが出土し、過去の調査で確認された官衙的建物群の広がりを確認できた。	
要 約								
調査地は筑後川右岸、標高約10mの低地に立地する。古代においては御井郡の北東端に位置し、中世においては甘木から高良山に至る「太閤道」に接する。調査の結果、弥生時代から中世までの豊富な遺構・遺物を検出した。中でも、奈良時代の大型掘立柱建物が検出されたことは注目され、過去の調査で確認された官衙的建物群が当地まで展開していることが明らかとなった。特筆すべき遺物として、銅製の腰帯具があり、正八位相当の官人が関与していたものと考えられる。また、同時代の馬の歯も出土しており、馬に関連する施設、特に近都牧の存在が示唆される。								
土木工事の届出日		平成25年7月23日 (25文財第506号)			遺物の発見通知日		平成25年1月27日 (25文財第1186号)	

古賀ノ上遺跡 ー 第3次発掘調査報告 ー

久留米市文化財調査報告書 第351集

平成27年 3月31日

発 行 久留米市教育委員会

編 集 久留米市

市民文化部 文化財保護課

印 刷 中村印刷有限会社

久留米市梅満町972

